IS~未来を変える力~

英牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～ 未来を変える力～

【Ｎコード】
Ｎ９６６０Ｗ

【作者名】
英牙

【あらすじ】
最強のパワード・スーツ　インフィニット・ストラトス通称ＩＳの登場から２５年後。
宇宙コロニーが建設され、人類は新たなフロンティアを目指せるはずだった。
だが、人類が培ってきた女尊男卑が暴走を始めた。
これは未来を変えるために戦った人たちの物語。

作者はＬＲをクリアしたぐらいのものです。

余り、深く考えないでください。

プロローグ（前書き）

いきおいと、ちょっとナーバスな頭をスッキリさせるために書きました。
後悔はしていません。

プロローグ

インフィニット・ストラトス通称ＩＳ

天才博士・篠ノ之束が日本で造りあげた最強のパワードスーツ。
それが表舞台にたったのは、ある事件がきっかけだった。
その事件は世界中のミサイルがハッキングされ、日本に向けられた。
数はおよそ約２０００発だった。
誰もが絶望する中、それは現れた。
白き鎧を身に纏い、空を舞う一人の女性。
女性は手に持つ剣を振るい、次々とミサイルを切り裂く。
届かないミサイルは荷電粒子砲で撃墜していき、全てのミサイルを撃破した。

あれは何だ？
直ちに世界は動き出した。
捕獲か、撃墜を目的とした艦隊や部隊が揃った。
圧倒的な物量による戦闘。
誰もが女性は負けると、思っていた。

だが、結果は違った。
世界の最大戦力ともいえる部隊と艦隊が壊滅。
その上、その戦闘では誰一人死んでいなかった。
追撃のために部隊を送ったが、完璧なステルスにより、あっけなく逃げられた。
その圧倒的な性能によって世界は敗北を余儀なくされた。

後にこれを白騎士事件と呼ばれた。

世界はＩＳの性能を恐れて、ＩＳを一つの国家である日本に独占させないため世界へと散らばった。
その数はたったの４６７機だった。
後に開発者の篠ノ之束は白騎士事件後、行方不明となった為、それぞれの国家と企業がＩＳを独自に開発をしていく中、ＩＳの唯一の欠陥点の改善政策が行われていた。

ＩＳの唯一の欠陥、それは女性にしか扱えないことだった。

直ちに女性の優遇処置が行われた。
しかし、ＩＳが使えない男性にとってはその政策は苦しみを呼ぶだけだった。
女性はＩＳを使えるというだけで、男性を見下し、あまつさえ何の罪もない男性をいたぶり、刑務所に入れるものもいた。

後に言う、女尊男卑である。

そんな時にある転機が現れた。
なんと、男性がＩＳを動かしたのだ。
彼の登場で男性の立場の改正が考えられた。
だが、それはＩＳの開発者・篠ノ之束が仕組んだものだと判明。
それにより、結局、改正案も見送られた。

しかし、それでも人々はＩＳを手放せなかった。

ＩＳは人類の未来を創る。

この時は誰一人それを疑わなかった。
乗れない男性すらも・・・

ＩＳによってもたらされた女尊男卑の風潮は人類の絶滅を運ぶ狂気を作り出していた。
それが表に出たのはＩＳの登場から２５年後の時間が経過した時だった。
当時、やっとの思いで男性でも乗れるパワード・スーツが完成した。

作業用パワード・スーツ
マッスル・トレーサー通称ＭＴ

そしてＩＳの兵器化で進んでいなかった宇宙開発が進み始め、宇宙コロニーが建設された。
宇宙コロニーはＩＳに搭乗できる女性が優先的に住み、完成した時には人類は新たなフロンティアを目指せるはずだった。

それは唐突に始まった。
宇宙コロニーが完成したその日、コロニー開発担当者であり、最高代表者が会見という名の宣言を発表した。

「こちらは宇宙コロニー・天上から地球の人類に送る。我々人類は劣等種である雄を今まで飼ってきた。子孫を増やすしか利用価値がない存在がかつて男尊女卑を掲げていたのは実におこがましい。そんな時代がまた訪れないよう、私はここに宣言する！劣等種である雄とそれを支持する雌を全て駆逐し、人類の明るい未来を創りあげよう！恐れることはない！我々には神の力に近いＩＳがある！さあ、人類に未来と平和を！」

その宣言の通り、天上から次々とＩＳは現れて、世界中の国家の首都を攻撃を加えた。
当時はＩＳを宇宙コロニーの開発を進める為に約１００機のＩＳを宇宙に上げていた。

国家も対抗するために地球にあるＩＳで戦いを望んだ。
ＩＳに対抗できるのはＩＳだけなのだから・・・
その考えがいけなかった。
敵は宇宙だけではなく、地球にもいたのだ。
次々と地球のＩＳ搭乗者は裏切りを行い、なんと地球のＩＳ搭乗者は全てが裏切り者だったのだ。
その結果、国家は次々と解体されて三日後には全ての国家が姿を消していった。

この戦いを後の国家解体戦争である。

国家が解体され、その後は男性にたいする虐殺が始まった。
老若男女関係なく、男性は徹底的に殺し、男性を支持する女性を殺し始めた。
更には、男性を魔女狩りのように処刑する者も現れた。

だが、そんな時に企業が動き出した。

ＩＳの存在により、存在を危ぶまれた傭兵機関レイヴンズ・ネスト
従来兵器に秀でていたが、第二世代が頭打ちだったクレスト・インダストリアル社
特殊装甲に秀でていたが、シールドバリアーのため、有用性を認められなかったキサラギ重工
特殊エネルギーに秀でていたが、ＩＳには必要ないと否定されたミラージュ社

この四つの企業は同盟を結び、反宇宙コロニー組織アライアンスを結成。

彼らは独自の技術でＩＳに対抗できる兵器を開発を始めた。
作業用のＭＴを改造し、戦闘用のパワード・スーツが完成した

戦闘用パワード・スーツ
アーマード・コア通称ＡＣ

このＡＣはＩＳに比べて性能は劣るが、圧倒的な物量で宇宙コロニーと敵対した。
戦局は地球に傾き出した時に宇宙コロニー代表者は解体した国家から核兵器を手に入れ、浄化と評し、地球に打ち込んだ。

その結果、地球全土は放射能に汚染されてしまった。

その後、数で圧倒的していた地球側は一気に劣勢に追い込まれ、地下世界に逃げ込んだ。
だが、企業はいや、地球側の人類は諦めていなかった。
３年後、程なくしてＡＣは進化を遂げた。

アーマード・コア・ネクスト通称ネクスト

このネクストは搭乗者・リンクスと自然に悪影響な汚染を強いる変わりに絶大的な力を発揮した。
造られた３機のネクストはＡＭＳ（アレゴリー・マニピュレイト・システム）適性がもっとも高い三人に与えられた。
戦場に出たこのネクストは次々とＩＳを撃退していき、ＩＳは８機までに激減した。

だが、いくらネクストは強くてもリンクスは違った。
数々の戦いを経てネクストの動力源、コジマ粒子による汚染がリンクスを汚染し、仲間の一人を死に追いやった。

名誉ある戦死・・・

戦いには犠牲は付き物だった。
俺たちは彼を弔うために、これからも戦うと心に決めた。
だが、度重なる戦いにより戦線維持ができなくなった。
だから、我々残された人類は最後の戦いに出る。
今残っているネクストと秘密兵器による宇宙コロニー撃破の作戦を
もうすぐ決行される。
だが、この作戦にはネクストは1機しか出ない。
もう1機のネクストは希望と言える作戦に向かった。

差し詰め我々の作戦は絶望と言ったところか・・・

皮肉なものだ。
我々を裏切った俺の親友に制裁と家族や恋人を奪った宇宙コロニー
に復讐のはずが、結末はこんなものか・・・

これ以上は書くのは止めておこう・・・
これは語られる物語ではないのだから・・・

ドアが開く音が部屋に響き、今まで本を書いていた男が手を止めた。
男は振り返り、後ろに目をやると、そこには軍服を着た男が立って
いた。

「隊長、時間です」
「あぁ。分かっている・・・」

男は本を閉じると、ドアに向かって歩き出した。

男はドアを開けた男と一緒に出ると、部屋のドアを閉めた。
誰もいなくなった部屋にはドアを閉めた音が響き渡りこだました。
部屋にいた男が書いていた本にはタイトル名と著者名が書いてあった。

タイトル
語られぬ物語
著者
五反田　弾

第1話：五反田弾

二人の男が作戦会議のため司令部へ向かっていた。
一番前を歩いている赤い髪の男は先程、本を書いていた男、五反田弾である。
彼は唯一の対ＩＳ部隊　ＡＳ（アーマーソルジャー）隊の隊長であり、地球側の人類の切り札である。

「状況はどうなっている？」
「はい。現在のところは作戦に問題はありません。」
「そうか・・・この間まで作戦が上手く行けばいいが・・・」

現在、弾はある重要な作戦であり、最後の作戦に向けて一つの懸念があった。
もしも、今回の作戦がコロニー側に知られると、敗北するのみだった。
そう考えていると、一人の女性が歩いてきた。
その女性は長い髪に鉄のウサギ耳のカチューシャを付けており、服装は不思議な国のアリスが着ている様な服だった。
若々しく見える、その女性はかつてＩＳを造りあげた天才、篠ノ之束である。

「やぁ、弾くん。こんにちは」
「えぇ、こんにちは篠ノ之博士。」

束と弾はお互いに挨拶する。
それは端から見ればおかしな現象であった。
あのＩＳを造りあげて、人類をこんな目に合わせた張本人がここにいる。

本来なら処刑されるか、独房に入れられて、あらゆる苦痛と辱しめ受けていただろうに。
当人は何もなかったように挨拶をしてきた。

「いやぁ～今日は本当に晴れていて、絶好のピクニック日和だねぇ～」
「そうですね。外に出られたら、ですがね・・・」
「はは、そうだね～」

お互いで皮肉を言い合うと、自然と二人は笑い出した。
しばらく、笑い合っていた二人だったが次の瞬間、真剣な眼差しでお互いの顔を見る。

「・・・いくんだね？」
「・・・えぇ」

その会話が自分達の最後になるのだと、弾と束は思った。
少しの沈黙が訪れると、束が口を開いた。

「・・・今回の作戦は本当に死ぬよ。今ならやめられるよ？」
「・・・そうかもしれません。ですが、この作戦はやめる訳にはいきません。」
「・・・そっかぁ」

弾と束がそう会話を終えると、お互いに背を向けて歩き出した。
次に会うことはないだろう。
会えるとすれば、それは宇宙より遠い世界だろう。
ふと、束はあることを聞くのを忘れていたので、足を止めた。

「・・・最後に一つ聞いていい？」

「何ですか？」
「何で、あの時庇ったの？」
「・・・」

その言葉の理由は一年前のある戦場で起きていた。

当時、ネクストが造られて戦場に現れ初めた頃のことだった。
約１００機のＩＳと、３機のネクストと約１０００機の通常ＡＣによる総力戦が始まった。
新参者のネクストとリンクス達だったが、その圧倒的な性能により、ＩＳを次々と撃破していく。
そんな戦場の中、弾は自らのネクストを駆りながら戦っていると、ある奇妙な光景が目に止まった。
なんと、複数のＩＳが１機のＩＳと戦っていたのだ。
普通、戦場では仲間の裏切り者を制裁を加えているところと思うが、ＩＳ搭乗者の裏切りはありえないことだった。
その理由は、撃墜したＩＳをもう一度使おうとした計画があった。
その計画は撃墜したＩＳのコアを再利用しようし、ＩＳ同士の戦いに持っていき、更には宇宙コロニーに攻撃を加えようとした。
だが、ＩＳがいざ完成し、フォーマットをした時に事件は起きた。
当時、最も信頼できる女性がＩＳ搭乗者に選ばれたが、人が変わったように施設と研究員に攻撃をした。
その施設は敵から隠蔽する為に通常ＡＣは少なかった上に、当時にはネクストは存在しなかった。

結果は当然の施設の壊滅。
搭乗者も予め仕掛けてあった自爆システムを起動させて事なきを得た。

それらの結果からある仮説が生まれた。

一つは1機のＩＳによるコアネットワークの支配。
ＩＳのコアはお互いの位置が独自のネットワークに繋がっており、何万光年も離れていても位置や座標がお互いに分かる。
なら、そのコアネットワークを支配できたらどうなるのか、結果は簡単なものだった。
ＩＳを強制解除できたり、強制展開できる。
また、ＩＳと搭乗者は意識化に措ける共有が可能であり、そこから搭乗者の支配が可能ではないかと、専門家は語っていた。

もう一つの仮説はＩＳの進化の結果である。
ＩＳには自己進化機能があり、搭乗者との最適化とシンクロ率を上げる機構である。
また、ＩＳには疑似人格があり、搭乗者との意識化に措ける共有は、これによる現象が大きい。
もし、ＩＳの疑似人格が人のように感情を覚え、女尊男卑を覚えてしまったらどうなるのか、それは最悪の結果を招いたことになる。
ＩＳは搭乗者を守る機構があり、それに誘発して女尊男卑を覚えてしまい、いつか男性は搭乗者（女性）の敵になると思いたってしまった。
そのため、ＩＳは搭乗者の敵である男性を抹殺しようと考えたのではないかと、専門家は語っていた。
だが、この仮説は矛盾していた。
それならば男性を支持する女性を殺す意味がないからだ。
あくまでも男性を敵として殺すのが目的ならＩＳに搭乗者に成れる女性を殺したら、搭乗者を守ることに矛盾していた。
よって、前者の仮設が有力となった。
なら、そのＩＳを破壊すれば支配されていた搭乗者達は元に戻る。
人々には希望が生まれた。

だが、弾やＩＳに家族や恋人、友人を奪われたものたちには関係なかった。

ＩＳが憎い・・・

ただ、ＩＳを破壊し、この世から絶滅したいものが多かった。
何よりも、弾は国家解体戦争の時に、両親や祖父、妹を失っていた。
開戦の当日、買い物に出ていた弾は、家に帰ってきた時に見たものは燃え上がる家と、血に濡れて転がっている妹・蘭の携帯だった。

それを目の当たりした弾は悲しみと深い損失感に襲われた。
その損失感を埋めたのが、恋人の布仏虚（のほとけうつぼ）とその妹の本音だった。
彼女達の支えがあって、辛いＩＳからの逃亡生活を弾は耐えきれた。
ＡＣが登場した時、弾は真っ先に搭乗者に志願した。
弾は復讐の気持ちもあったが、何よりも、虚と本音を守る為に弾は戦いを決意した。

それからしばらくして、悲劇は始まった。
当時の政治派の上層部はまだＩＳに依存していた。
そのため、ＩＳのコアの再利用する計画が始まった。
正気の沙汰ではなかったが、確かにＩＳを再利用できれば最高の戦力になる。
１機だけあった戦利品のコアを使用して開発が始まった。
だが、いざ完成したＩＳだったが搭乗者に問題があった。
国家解体戦争の時のように裏切り者達が乗っては意味がない。
そこで上層部は信頼できる女性を選抜し、尚且つＩＳに深い知識を持つ者が選ばれた。
そして、選ばれたのが、戦争の前にあった当時、唯一のＩＳ専門の学校であるＩＳ学園の出身生の虚だった。

当然、弾は反対したが、虚は戦争を早期に終結のために、その申し出を受けた。
弾は何度もやめるように呼び掛けたが、虚は頑として意思を変えなかった。
弾は泣く泣く虚の意思を受け入れた。

それが間違いだった。
フォーマットをした途端に虚は暴走した。
施設は壊滅し、研究員や、ＩＳの整備士としていた本音の死と虚をＩＳごと自爆させられて計画は中断した。

その日から弾は人が変わったように戦いに身を投じた。

憎い・・・
ＩＳは自分から何もかもを奪い取った。
なのにＩＳは空を優々と空を飛び続けている。
あの空から引きずり降ろして、徹底的に壊して破壊尽くしてやる。
何時しか彼の夜叉のように戦う姿から『赤い夜叉』と恐れられた。

そんな弾のネクストのリンクスに選ばれて初陣だった。
初めはＩＳ全機を破壊を考えたが、もしも敵に裏切り者がいるならば利用できる。
今まで謎だった敵の情報を得られる。
危険はあったが、情報は何よりも重要なため、それにかけて動いた。
裏切り者と思えるＩＳ以外を背中に取り付けてある三連のコジマ粒子砲による奇襲攻撃を与えた。
突然の奇襲にＩＳ部隊は陣形を崩した。
そこへ間髪入れずに両手に持っている二丁のアサルトライフルで次々とＩＳを撃破していく。

かつて乗っていたノーマルと呼ばれるACでは1機落とすのに10機の連隊が必要だったはずが、まるで的を撃ったように簡単に撃破できた。

流石はネクスト。
次世代と呼ばれるだけはある。

あっという間にIS部隊を撃破した弾は、助けたISに振り返った。
その搭乗者の顔を見ると、弾は酷く助けたことを後悔をした。
その顔は紛れもなく、かつてISを発表して自分の家族と恋人を奪った原因を作った科学者・篠ノ之束だった。
一瞬、束を殺そうと銃口を向けようとしたが、思いとどまった。

今は敵の情報が欲しい。
あの篠ノ之博士だ、何かを知っているのかもしれないし、現在、建設中の秘密兵器の開発を早期にできるかもしれない。
ならば、今は彼女を捕らえて利用すればいい。
殺すはその後にできる。
弾は束に同行するよう呼び掛け、断るなら痛め付けてでも連れて行く言う。
束はあっさりと受け入れて、弾に基地まで付いていく。
基地に到着した時、上層部は早々に査問会議を開いた。

初めは束をどう処断するかの会議と考えたが、実際は敵の情報を知るための会議だった。
そこに召喚された束は何故このような事態になったのか、それを語り出した。

束が説明した内容は今までの仮設をひっくり返した。
ある1機のISが特殊な単一能力（ワン・オフ・アビリティー）に目覚めた。

その能力は攻撃能力はなく、況してや、自分への補助能力もなかった。
だが、その能力は女尊男卑の世界には最悪の能力だった。

能力名『伝心転換』
ＩＳのネットワークを通じての心の増幅と鎮静化の能力。
元々はＩＳ搭乗者の過剰なまでの心を押さえたり、心を病んでしまったＩＳ搭乗者のケアをする能力だった。
本来なら治療系のＩＳでもっとも特殊な能力だった。

だが、その能力を発現させた搭乗者は女尊男卑の申し子のような性格だった。
そんな彼女が考えた男性抹殺計画は自分の単一能力の応用を考えた。
他者の心を癒す能力なら、相手の心を操作できるのと、同じだと思いついた。

しかし、問題があった。
いくらＩＳが最強でもＩＳ同士は互角。
それもコア・ネットワークの中でも支配力が強いＩＳでなければ、
それは不可能だった。
更には、人の心を操作する場合、何処かで不具合が起きてしまい、
最悪、発狂して死んでしまう。

だが、その二つの問題を片付ける要因が現れた。
一つは宇宙コロニーの衛星通信アンテナ。
特に変わったものではなかったが、そのアンテナは特殊で、ＩＳのコア・ネットワークの応用で造られたものだった。
それを改良して単一能力を強化した。
これにより、コア・ネットワークの全てのＩＳに侵入できるようになった。

もう一つは女性の女尊男卑の考えだった。
なかった考えを入れると、不具合が起きるなら、元々ある考えを入れれば問題ないだろう。
なら、皆が心の中から思う差別意識を利用しようと考えた。
単純に言えば、元々あった女尊男卑の考えや、暗い考えを増幅させて、それ以外はどうでもよく思わせた。

結果は成功だった。
完全な形になった単一能力を発動と同時に全ＩＳにハッキングして、搭乗者の意思を改竄した。
そして現在に至る。
その説明を聞いた幹部たちは驚愕した。
それが本当ならＩＳ搭乗者達は改竄されているとはいえ、自らの意思で裏切ったのと、同じだからである。
ならば、当初のように敵の張本人を倒してもＩＳ搭乗者は解放されないし、戦争は終わらないということである。

すると、幹部の一人が束に質問した。

「ならば、貴女は何故平気なのですか？」

確かに不自然だった。
それが本当ならＩＳに搭乗していたら、意思を改竄できるなら、束が搭乗していたのに、それは矛盾していた。
だが、束はその理由は自分が搭乗するＩＳは通常のＩＳのコア・ネットワークから切り離しており、影響は受けないと説明した。
他の幹部が「ＩＳを造り出した束なら恐らくあると思われた強制停止コードを使い、無力化できるのでは」と提案したのだ。

文字通り、戦いを止める最後の手段でもあった。
今まで、ＩＳによって支えられた軍経済ができなくなる。
だが、このままでは、人類は全滅する。
しかし、束は申し訳なさそうな顔で、それはできないと言った。
ＩＳに搭載された自己進化機能は次第に自分の予想を遥かに超える進化を遂げており、いくつかのＩＳは強制停止コードを受け付けなくなった。
更には、戦いの張本人のＩＳと宇宙コロニーのアンテナにより、全ＩＳにハッキングできないから、無理だと言った。

その後は長い論議が始まった。
科学者や政治家、企業の代表者達は色々な質問を投げ掛けて、あらゆる可能性を追求した。
だが、束はことごとく、無理だと言った。

皆が嘆き続けていると、一人の政治家が不気味な笑みを浮かべた。

「これ以上は宇宙コロニー側についての議論は無意味だろう。ならば、我々が裁くべき人間をどう裁くか議論したい。」

その言葉に上層部の幹部達は一斉に束を見た。
皆が皆、今まで自分達が受けていた屈辱や苦しみは全て束が原因だと考えていた。
怒りの矛先を皆が束に向けていると、一人の男が立ち上がる。

弾である。
当時、この場に出席していたのは何故連れて来たのかの証言と来れなくなった軍司令官の決定を伝える為だった。
弾は立ち上がると、大声で怒鳴り散らした。

「ふざけるな！戦争の原因はてめえらが女尊男卑にしかならない政策や、俺達民衆がＩＳを神格化させたのが原因だろうが！確かに篠ノ之博士がＩＳを制作したのが原因だが、そこまで導いたのは、俺達が原因だ！それを一人の征にして言い訳がねぇだろうが！それにな、彼女には現在、建設中の秘密兵器の開発に協力してもらう！これは俺個人ではなく、軍司令官の決定でもある！もし、彼女の命や心を脅かす真似をしたら、俺が相手になってやる！。」

その言葉に上層部の幹部達は何も言い返せなくなっていった。
その後の論議で、上層部は束の身柄を弾に預けることを決定した。
これは上層部の嫌がらせでもあり、あれだけのことを言った責任をとらせる為でもあった。

その後、弾は何故だか束に気に入られて、お互いで名前を呼び合う仲にまでなっていた。
篠ノ々束は自分が気に入ったもの以外は興味がないと言われており、戦友達からは冷やかな目で見られていた。

それからは共に戦い、何時しか二人は不思議な絆が生まれた。

現在

「君はあの時、上層部から私を庇った。何でなの？」

二人の間に沈黙が生まれる。
すると、弾は重い口を開いた。

「約束でしたから・・・」
「え？」

「死んだ恋人と最後にちょっとした約束をしたんですよ。『これから先、何が合っても貴方は変わらないで。こんな世界だけど、私の愛した貴方の間までいてね。』それが彼女との最後に交わした約束でした。」
「・・・」
「でも、できなかった。守るべき虚や本音を失って変われずにはいられなかった・・・。そんな時、貴女が吊し上げられようとした時に心の中で、かつての自分が『これでいいのか？昔の俺なら彼女を助けるぜ？それが虚との約束だから・・・』すると、いつの間にか貴女を助けていました。・・・理由はそれだけです。」
「・・・ごめん。」
「いえ、いいんですよ・・・」

弾と束はただならぬ空間を作り出し、それを見ている弾の部下はいような空気に帰りたいと思っていた。
その空気を察した弾は話を切り出した。

「それでは、作戦の会議がありますので、それでは・・・」

そう言って弾は、その場から立ち去ろうとした。

「あ、ちょっと待って！」

弾が束に呼び止められると、くるりと振り返る。
すると、口に何か暖かいものが当たり、束の顔が弾の目の前まで来ていた。
弾は頭の中が真っ白になり、思考が停止した。
ぷはぁと言いながら、束が離れてやっと自分が何をされたのか気が付く。

「な、何を・・・？」
「いやぁ～まさか、この束さんが恋をするなんて思わなかったよ～。きっと、弾くんはお姉さん系の人を惚れさせるだねぇ～」
「え？あ、いや、恋？」

弾は口をぱくぱくさせながら、未だに状況が読めなかった。

「これで彼を送って、上手くいけば弾くんの元恋人さんより先に弾くんを取れるかも知れないねぇ～」
「え！？いや、え！？」
「じゃあねぇ～。私は最後の調整があるから、いってくるねぇ～」
「え！？ちょっと！？」

束が立ち去った後、弾は暫くの間、その場から佇んで束が走り去った廊下を眺めていた。
弾が疲れてため息をすると、部下が近づいて来た。

「隊長。」
「なんだ？」
「おめでとうございます。」
「・・・ありがとう。」

第2話：ネクスト

作戦の説明に移ります。
今回の作戦は衛星軌道掃射砲・エーレンベルクの防衛戦です。
エーレンベルクはコジマ技術の結晶で、宇宙コロニーの破壊の為に設計された、我々人類の最後の切り札です。
あなた方は、発射までの時間稼ぎと残り僅かなＩＳ部隊の殲滅をお願いします。
恐らく敵は全てのＩＳを向かわせるでしょう。
残るＩＳは８機ですが、その全てが幹部のＩＳ搭乗者です。

セシリア・オルコット
機体世代：第三世代
機体名：蒼い雫（ブルー・ティアーズ）
旧イギリスの代表で、ＩＳ適性はＡと高い数値を出しただけではなく、搭載されている自立兵器である、機体の名前の由来となった兵器『ブルー・ティアーズ』の適性がＡです。
自立兵器の数は六機で、レーザー兵器が四機とミサイル兵器が二機です。
また、ＢＴ兵器は最高状態に達した時に起こる偏向射撃（フレキシブル）を使います。
これはレーザーの軌道を搭乗者の思考により変化する特殊兵器です。
遠距離に持ち込むと不利です。
接近戦で迅速に撃破してください。

凰（ファン）・鈴音（リンイン）
機体世代：第三世代
機体名：甲龍（シェンロン）
旧中国の代表で、ＩＳ適性はＡです。
甲龍はエネルギーバランスを求められて設計されており、肩に搭載

された空間圧兵器『龍砲』は空間に圧力をかけて撃ち出し、砲身も砲弾も見えない上、砲身斜角が制限がありません。
また、二対の連結青龍刀『双天牙月』は威力は高く、接近戦に適しています。
近距離、中距離は不利になります。
遠距離からの砲撃をお勧めします。

シャルロット・デュノア
機体世代：第二世代
機体名：ラファール・リヴァイヴ・カスタム？
旧フランスの代表で、ＩＳ適性はＡです。
機体性能は他の幹部の中で劣りますが、技術面に措いて最高数値を出しています。
接近戦、中距離戦、遠距離戦において対応の早い万能型で、高速変換（ラピット・スイッチ）を得意とします。
基本的に戦術は彼女には効果はありません。
しかし、他の機体との性能差の低さを利用すれば勝率は上がります。

ラウラ・ボーデヴィッヒ
機体世代：第三世代
機体名：黒い雨（シュヴァルツェア）
旧ドイツの代表で、ＩＳ適性がＡです。
国家解体戦争以前は、第三世代の搭乗者の中で最強の座に君臨する軍人でした。
その実力は高く、ＡＣ部隊の大半は彼女一人で壊滅されました。
その理由は搭乗するＩＳの特殊兵器、ＡＩＣ（アクティブ・イナーシャル・キャンセラー）『慣性停止結界』を保有しているためです。
これは搭乗者の周囲の物質を停止させる効果があり、従来の兵器を無力化と敵機を停止できます。
また、遠距離からの砲撃ができる大型レールカノン、接近戦のプラ

ズマ手刀、中距離戦に適したワイヤーブレードを保有しています。
対策としてコジマキャノンによる超遠距離からの砲撃による奇襲をお勧めします。

織斑一夏
機体世代：第四世代
機体名：白式（びゃくしき）
現在、確認されている最強のＩＳ搭乗者であり、初の男性ＩＳ搭乗者です。
かつて、最強のＩＳ搭乗者『プリュンヒルデ』の織斑千冬の弟であり、潜在能力は姉を越えています。
武装は接近格闘型ではありますが、左手に搭載されている荷電粒子砲と爪に右手に握られている雪片弐型には注意して下さい。
白式の特殊能力『零落白夜』はあらゆるエネルギー・シールドを無効にできます。
彼にとってはネクストの粒子シールド『プライマル・アーマー』も意味をなしません。
接近を注意しつつ、遠距離による迅速な撃破をお願いします。

以上が敵機に関する国家解体戦争以前の情報です。
現在はどのようにＩＳが変化を遂げているのかわかりません。
なお、現在まで確認されていないＩＳが１機います。
この敵機に奇襲の恐れもありますので、注意して下さい。

また、今作戦の成功のために支援兵器である対ＩＳ兵器『無音』と『千里眼』を約４００ｋｍに散布しています。
無音はＩＳのハイパーセンサーを無力化でき、これによりエーレンベルクの座標の場所を特定できなくするデコイです。
また、千里眼はＩＳに付着すると、ＩＳの座標を、例え長距離にいるＡＣや司令部に伝達するナノマシンです。

今回の作戦は失敗を許せば人類は全滅の道を選びます。
けして負けられない作戦なので勝利を得て下さい。

以上、作戦の説明を終わります。

ネクスト
その開発が行われたのは、核が地球に落とされる前から行われていた。
開発目的は『激化するＩＳとの戦いを早期に終結する』ために設計された。
求められたのは『単機によるＩＳを凌駕する圧倒的な力』だった。
すぐさま開発が始まり、プランができあがった。
ブーストシステムにはＡＣのＯＢ（オーバー・ブースト）システムを採用と追加に前後左右に急速移動するブーストを搭載され、重火器や、エネルギー兵器は一撃で絶体防御を突破する、それらを兼ね備えた最強の兵器を完成に全てを捧げた。

しかし、開発は途中から滞りだした。
その一番の原因はエネルギーの問題だった。
開発のプランとして『半永久的に稼動するエンジン』が必要だった。
補給が必要なエンジンでは長期に亘る戦いにならない。
だが、半永久に稼動するなら、戦いをより効率よく進める。
早急にエンジンの開発が始まった。

しかし、エンジンの開発はうまくできあがらなかった。
原子力は搭載が不可能とされ、自然エネルギー、反陽子も長く稼動ができなかった。
開発は中断せざるおえなくなっていた時、それは発見された。
物質の研究をしていたコジマ博士は謎の物質を発見した。
それは今までのエネルギー物質を遥かに凌駕するエネルギー物質だ

った。
その物質は発見者・コジマ博士の名前から取り、『コジマ粒子』と名付けられた。

直ちに、コジマ粒子の研究が始まった。
研究の結果、コジマ粒子はＩＳのエネルギーの数百倍のエネルギーが精製できると判明した。
そして、とうとう半永久に稼動するエンジンが完成した。
更に、コジマ粒子を転用してバリアーを発生させる『ＰＡ（プライマル・アーマー）』ができあがった。
この時、使われた技術を『コジマ技術』と名付けられた。

また、操縦機関として『ＡＭＳ機関』を開発する。
これは脳に機体の操作を任せることにより、コンマ一秒の制御速度を無くすために開発された。
これならばＩＳの制御速度に追い付くことができた。
ただし、この操縦機関は生まれ持っての才能である『ＡＭＳ適性』を持つ者しか操縦できない。

そして遂に設計図が完成した。
この機体をＡＣの次世代として、『ネクスト』と名付けられた。
ＩＳを超える新たな時代を担うネクスト。
当時の開発者は誰もが喜んだ。

だが、ネクストは実際には造られることはなかった。
コジマ粒子とＡＭＳ機関に問題が発覚したからだ。

コジマ粒子は、その並外れたエネルギー精製量の反面、人体と自然に多大な汚染を強いることが判明した。
これでは戦争終結後、地球は人類の住めない星になってしまう。

また、ＡＭＳ機関は操縦を短縮する代わりに、脳に多大な負荷を掛けていた。
最悪、搭乗者は脳死の可能性もあった。

それらの要因があり、ネクストの開発は完全に凍結された。
結局、地球側は『ＡＣによる数の圧倒』を選んだ。
１機にＡＣ１００００機の予算は掛けられない。
また、数の利を利用とした作戦はうまくいっている。
ならば、地球を汚染する兵器は必要ない。
政治的にも、後に自分たちが裁かれるのはごめんだ。
このような事からネクストは造られなかった。

だが、政治家や企業は、この判断を後悔した。
戦局は地球側に向き出した頃のことだった。
４６７機あったＩＳは約１００機まで数を減らしていた。
勝利は地球側にあると、皆が思っていた。
しかし、前代未聞の攻撃を受けた。
予想こそされど、実際に行うとは誰も思わなかった。
宇宙コロニーが核兵器を使用したのだ。

元々、地下世界で隠れて生活をしていた地球側の政治家や企業は問題なかった。
しかし、地上にいた兵士は違った。
幾つかの施設に逃げ込んだ僅かな兵士は問題なかったが、大半の兵士を失った。
これにより、地球側は約１０００００００機いたＡＣを約２０００機までに失い、劣勢に追い込まれた。
地球側は、この状況を打開するためにネクストを造り出した。
もはや数の戦法はできない。
ならば、かつてＩＳが世界に最強を誇った理由である『圧倒的性能』

を取り入れた。
地球側は何の迷いもなかった。
たとへ、地球を汚染したことで罪を裁かれても、今を生き残らなければ意味がない。
そして3機のネクストは造られた。
この3機は核攻撃から生き延びたＡＭＳ適性の高い兵士に送られた。
その内の一番機・ストレイドは五反田弾に送られたのだった。

現在
ネクスト用格納庫

「コンデンサー異常なし。ブースター異常なし。センサー異常なし。コジマ粒子正常値。ＡＭＳ機関異常なし。」

弾は出撃の準備のために電子パネルを開いて機体の状態を調整と整備をしていた。
本来は機体の調整と整備は整備班の仕事だが、自分以外はコジマ汚染を受けて欲しくないので、一人でしていた。
時々、束が整備しているが、彼女はできるだけ入って欲しくなかった。
先程のこともあるが、彼女は作戦の要だ。
こんなことで死んで欲しくなかった。
そう弾が思うと、整備が終わった。
整備が終わると、弾は機体に乗り込んだ。
ＩＳは専用機と訓練機に分けられている。
専用機は搭乗者にフォーマットすれば自らを粒子かさせて、アクセ

サリー化できる。
これは搭乗者がどの様な状況に置かれても、ＩＳを展開できるようにするためと、他人が勝手に搭乗できなくするためだ。
訓練機はフォーマットすることはできないため、アクセサリー化はできないが、女性なら誰でも扱うことができた。
しかし、誰でも扱うことができる反面、よくテロリストに強奪されていた。
かつては亡国企業（ファントム・タスク）という組織があったが、今では有っても無くても関係ない時代であった。

ところ変わって、ＡＣはＩＳの専用機のようにアクセサリー化はできない。
代わりにファーマット技術はＡＩに遺伝子データを読み込ませることで敵に取られる心配はなくなった。
それはノーマルの進化したネクストも変わらない。

「遺伝子データチェック、完了。ネクストＡＣ・ストレイドを待機モードへ移行。」

弾は自分の専用機であるストレイドを待機モードにして、一息付くと、今までのことを考えた。
本来、弾は国家解体戦争が起こらなければ飲食店の跡取りになるはずだった。
だが、現実は違った。
国家解体戦争は起きてしまい、家も家族も恋人も失った。
その時から弾はただ、復讐のために戦い続けた。
しかし、次第に熾烈を極めた戦いの後、いつも切ない思いをしていた。
数え切れないＩＳを倒し、破壊しても弾の心は救われなかった。
「何故？」と弾は思うが、まったく答えがでなかった。

酷い時は戦う理由も忘れてしまう時があった。
そういう日が何日も続いたある日のことだった。

『俺は・・・何のために戦っているだ？』

その言葉に行きついた切っ掛けは単純な戦友達との雑談だった。
その時はお互いの無事と、次も生き残ることを願っての祝杯だった。
ふと、一人の戦友が「そう言えば、皆は何のために戦っているんだ？」と質問してきた。
その質問に大半は弾と同じで復讐が目的の者だった。
戦争に参加している大半の兵士は国家解体戦争の時に家族を失っている。
酷いものは目の前で家族を八つ裂きにされて殺されている者もいた。
そうなれば必然的に復讐のために戦っている者が多くなる。
弾は、この質問に余り興味がなかった。
戦場で戦っているなら当然、復讐が当たり前で、報復が目的なんだと考えていたからだ。
そんな質問に弾は呆れていると、一人の戦友が立ち上がった。

「俺は生き残るために戦っている。」

その答えに弾は思考が停止した。
今までの兵士達は報復が目的で戦っているはずが、その戦友は違ったからだ。
だが、利には適っている回答だった。
確かに宇宙コロニー側が勝利すれば、男性人類は滅ぶだろう。
なら、生き残るために戦うのは必然だと、弾は思った。
それがかわきりになったのか、別の戦友も違った回答をした。

「俺は家族のために戦っている。」

その回答は弾にとって共感できるものだった。
何故なら弾もかつては、その立場に立っていたのだからだ。
もっとも、弾は家族というよりは恋人のためだったが。
すると、少し気品がある戦友が立ち上がる。

「私は祖国の復興のために戦っている。」

その回答は弾のみならず、周りの戦友たちも驚いた。
現在で祖国と呼べる国は残っておらず、そんなことのために戦うものはいなくなっていったからだ。
だから、弾や他の戦友も驚いたのだ。

その後は恋人、友人、家族、復讐、国、生き残るために戦っていると皆が答えていく中、弾の番が回った。
弾は当然、復讐と答えようとした。
しかし、いざ言葉に出そうとしたが出ない。
戦友たちが見ている中、弾が出した回答は本人も予想外のものだった。

「俺は・・・何のために戦っているだ？」

その余りの予想外の回答に本人も驚いていた。
この言葉に弾は「俺は何を言っているんだ？」と疑問になった。
しかし、その言葉を言っても後悔の念はなかった。
そこで弾は、「これが俺の本音か？」と感じとった。
それからは、寝ても覚めても、その言葉が頭から離れず、弾を悩ませた。

そして現在の最終局面に至っても、その言葉が弾を悩ませた。
一息吐くと、弾はストレイドの最終調整に専念する。

「（考えても仕方ないか・・・）」

悩むのは問題ないが、今は最終局面の前である。
今は悩むよりも戦うことを考えよう。
半ば無理やりに近い感覚ではあったが、弾は納得しようとした。
弾はストレイドの最終調整を終えると、格納装備を確認した。

格納装備は戦闘中、弾薬が尽きた場合や武装が破壊された場合のための装備である。
持ち運びができる武装は、ＡＣ用のハンドガンやレーザーブレードなので少し心もとないが、もしものことがあるので、弾はいつも持ち運んでいる。
今回は最終局面なので、弾は最新鋭のネクスト専用のレーザーブレードを二つ持っていくことにした。

弾が二つを格納すると、ふと、ある項目が目に入った。
その項目は、今までネクストに一年乗っている中で一度も見たことが無い項目だった。
弾は気になり、その項目を開いた。
その項目に記載させて機能を見て、何故この項目があるのかが分かった。
こういうことをするのは一人だけだ。

「束さん・・・」

弾はつい先程、自分に告白した女性の名を呼んだ。
きっと、これは彼女からの最後の餞別だろう。

ならば、その期待に答えよう。
弾は、その項目を何時でも使えるようにセッティングすると、パネルを閉じた。
出撃の時間が近づき出したため、弾は最後に武装を装備する。
ストレイドの背中にコジマキャノンを二丁とネクスト用マシンガンを装備すると、格納庫の扉が開いた。
開かれた扉から夕明けのような赤い光が照り付けた。

「はは・・・」

これが自分が見る最後の夕明けだと思い、呆れて笑いが込み上げてきた。
恐らく、俺は死ぬだろうと弾は思った。
だが、戦わなければいけない。
今まで共に戦った戦友や、失った人たちのためにも、戦いに勝利しなければならない。
それに俺は、まだ答えを出していない。
その答えを出さなければ、今までの進んで来た道は何だったのかわからない。

「この戦いの向こうに答えはあるのか？」

弾はそう呟くと、ブースターを点火して出撃した。
まだ見ぬ、答えを求めて・・・

第3話：堕ちた英雄（前書き）

少し欝なので気よ付けてください。

第3話：堕ちた英雄

現在、弾は奇襲のための砲撃ポイントに向かっていた。
何故、弾がわざわざ奇襲をするのかは、一重に敵機の性能と数の問題があったからだ。
確かにネクストは現存するＩＳを遥かに凌駕している。
しかし、それはネクストであって搭乗者『リンクス』は違った。
いくら強くても、複数の戦闘では撃墜の可能性がある。
かつて、大群のＡＣが性能の差があるＩＳで撃墜したような結果がある。
ならば、わざわざ正面から戦う必要はない。
何よりも、今回の相手はかつて、国際最大の裏組織『亡国企業（ファントム・タスク）』を滅ぼした英雄と呼ばれた人達だ。
けして正面から戦うべき相手ではない。
できるだけ、奇襲を加えて敵機の数を減らすべきだ。
弾が、しばらく飛行を続けていると、砲撃ポイントである高台に到着した。
そこには二つのコジマ技術で造られたエネルギーライフル『コジマライフル』が置いてあった。

「こちらネクストＡＣ、ストレイドだ。砲撃ポイントに到着。指示を願う。」
『了解。こちらオペレーター。ストレイド、目の前にコジマライフルがあるな？現在の装備であるマシンガンを置き、それを装備してくれ。そのコジマライフルは、長距離砲撃ように改造したカスタム兵器だ。その効果は、お前のネクストＡＣのＰＡに使うコジマ粒子を攻撃に転用する代わりに、攻撃力を高め、それにより長距離砲撃を可能にした。だが、その代わりに砲身は一丁につき、二発が限界だ。二丁とも二発撃った後は、パージしてマシンガンを装備してく

れ。以上だ。』
「了解。」
弾は司令部の指示に従い、両手に装備してあるマシンガンをロックをかけて置くと、目の前のコジマライフルを装備する。
コジマライフルを装備した弾は、長距離から弾幕と爆発音を聞こえてきた。
それは、最後の戦いの幕が上がったことを意味していた。
「始まった・・・」
弾は思う。
この虚しい戦いは止められない。
ならば、自分ができる最後の幕引きをするだけだ。
弾はコジマライフルとコジマキャノンを弾幕が起こっている場所に向けて構えた。

「こちらネクストAC、ストレイド。攻撃は何時でもできる。急ぎ敵機の座標を送ってくれ。」
『こちらオペレーター。こちらも準備ができた。座標は送るが、最初の敵機はどれにする？残念だが、敵機は捕らえられないよう、動き続けてる。初弾で命中するのは一機のみだ。』
「シュヴルツェア・レーゲンの座標を送ってくれ。あれは接近戦になると動きが止められる。初弾で撃墜したい。」
『了解。座標を送る。』
そうオペレーターがいうと、次の瞬間、ストレイドにシュヴルツェア・レーゲンの座標が送られた。
弾は座標の方に銃口を向けて、エネルギーチャージを開始した。

「これが、この世界の最後の戦いだ。後のことは向こうの俺とマク坊に任せるぜ・・・」

弾がそう言うと、コジマライフルのエネルギーチャージが終わった。そして弾は自分自身の最悪の終わりに対して笑みを浮かべた。

「さあ！幕引きの時間だ！」

弾の叫びと共に、全てを終わらせる光が放たれた。

戦場

「ははははは！どうしたの？たったそれだけ？まったく、的にもならないはね。ははははは！」

「あらあら。鈴さん。この殿方たちは現状理解ができなくてよ。余りいじめてはかわいそうですわ。」

そこには狂気に満ちた女性たちが空を舞っていた。

一見、美しく見える、綺麗な花のような女性だが、その笑みは狂気に満ちていた。

中でも青いＩＳブルー・ティアーズのセシリアと、赤いＩＳ甲龍の鈴音は差別と侮辱の眼差しで戦士たちを笑った。

その地表には、何かに押し潰されて、頭が潰れたＡＣ、複数の穴が開いて、そこから血が流れ出たＡＣ、切り傷と複数の穴が開いたＡＣ、複数のＡＣがバラバラに吹き飛ばされてできたクレータがあった。

また、ある者はＡＣから引き摺り出されて両手両足が無くなった男性がいた。

その男性は痛みと恐怖により、息を荒くしていた。

「あ。まだ生きてる。」

そうオレンジ色のＩＳラファール・リヴァイブ・カスタム?のシャルロットが言うと、地表に降下した。
地表に降下したシャルロットは、ゆっくりと近づき、ＩＳ専用のショットガンを男性の頭に向けた。

「ひぃ！」
「じゃ、点数稼ぎのために死んで♪」

彼が最後に見たのは、銃口を向ける天使の皮を被った悪魔の笑顔だった。
次の瞬間、男性の頭が吹き飛び、その返り血がシャルロットに付いた。
シャルロットは付いた返り血を見て、不快な顔に歪ませた。

「うわぁ、汚い。下衆な男の血が付いたよ。」
「ははは！バーカ！至近距離から撃つからよ！」
「ふーんだ。第三世代の中途半端な機体に言われたくないね。」
「うるさいわね！あたしだって、こんな出来損ないは使いたくないわよ！」

口喧嘩を始めた鈴音とシャルロットはお互い罵倒しやった。
そんな二人を侮辱の眼差しで見ているセシリアは笑っていた。
だが、そんな三人には目もくれず、ずっと辺りを警戒していた女性がいた。
黒いＩＳシュヴルツェア・レーゲンのラウラである。

「？どうしましたの？ラウラさん？」

口喧嘩をしている二人と違い、ラウラの異変にセシリアは気が付いた。

「いや、あの３機が出てきていない・・・」

「ああ、そう言えば・・・」

ラウラの言葉にセシリアは思い出した。

それは唐突に現れた。

男性側の数の有利性がなくなり、宇宙コロニーが圧倒し始めた頃のことだった。

それはたった３機でありながら、ＩＳと同等か、遥かに凌駕していた。

あれはなんだ？

すぐさま情報収集が始まった。

まず、敵のデータにアクセスして手に入れようとした。

この時は搭乗者のデータも盗ろうとした。

そうなれば、重点的に搭乗者を狙える。

だが、ＩＳのコア・ネットワークも使ったが、まったくデータにアクセスできなかった。

何故だと思っていると、篠ノ之束が敵に付いたと情報が入った。

それはとても驚愕的な情報だった。

何故なら彼女は核攻撃をする前は宇宙コロニー側に付いていたのだ。

誰もが裏切ることに理解ができなかった。

聞いた噂だと、自分の親しい人たちが操られているのを知り、裏切ったのだと流れていた。

やはり、天才・篠ノ之束は理解できないものだった。
たかだか、そのくらいで有利な方を裏切るなんて、こちらとしては理解に苦しむ。
だいたい、宇宙コロニーの人間はみんな知っていることだ。
本当にくだらない人間だ。

次に捕虜を使っての尋問を開始した。
その時は、元ドイツ軍にいたラウラが任された。
敵の何名かを捕まえて、拷問を与えて吐かせようとしたが、一考に情報を吐かない。
しかたないので、そいつらの恋人か家族、友人を攫い、吐かせようとした。
しかし、それでも吐こうとしなかった。
しかたないので、目の前で友人らの喉を切り裂き殺した。

それを見て血相をかいて吐いたのが、知らないだった。
ラウラは今度は家族を目の前で一人一人銃殺した。
捕虜が泣きながら叫び続けるが、無視して家族を皆殺しにした。

最後に恋人を助けたいなら吐けと言ったが、本当に知らないと言ってきた。
ここまできたら、本当に知らないよいだと、ラウラは思った。
なら、いらないと思い、捕虜を銃殺した。

その後、掃除を恋人たちにやらせて、一緒に宇宙のゴミにした。
泣きながら死体を処理する恋人たちは五月蝿くて困るとラウラは語っていた。
その後も同じことをしたが、まったく情報は手に入らなかった。
結果、謎の３機の情報は手に入らず、ＩＳも８機まで減少した。

情報さえあれば、織斑千冬や篠ノ之箒を失うことはなかったと、ラウラは思っていた。

「でも、所詮は玩具を改造した玩具。きっと搭乗者は怯えて逃げたに違いありませんわ！」

「ふん。それもそうだな。」

所詮は男たちが造った玩具。
そんなものに負ける我々ではない。
きっと、負けた連中が弱かったからだと、ラウラは考えた。
プリュウン・ヒルデと第四世代が聞いて呆れる。

「しっかし、うざいわねぇ、このやり方。」

口喧嘩をやめた鈴音が面倒くさそうな顔で、そう呟いた。
それを聞いた他の搭乗者たちも顔を歪めた。

「まったくだ。まさか、ハイパー・センサーが封じられるとはな・・・」

「ええ、姑息な手を使う薄汚い彼ららしい戦法ですわ。」

「おかげで砲撃型の戦闘は終わってないよ。」

四人がこんな物を造るのは一人しかいないと、思っていた。
篠ノ之束である。
彼女ならこんな芸当は容易くできる。
それにたいして四人が怒りを覚えた。

「本当にうざいわねぇ。あの女。ＩＳを造ったからっていい気になって・・・」

「ああ、捕まえて拷問に掛けよう。そうすれば言うことも聞くだろ

う。何せ担当は私だからな・・・」
「ふふふ。楽しみですわね。あの女が泣き叫び、助けを求めても、拷問を続ける。昔、私(わたくし)を侮辱した罪を受けて貰えるなんて、笑いが止まりませんわ！」
「でも、殺しちゃ駄目だよ。彼女にはこれからもＩＳを造って貰わなければいけないんだから。」

四人は笑い続けた。
天才と言われ、ＩＳを造れると言われるから、重宝された篠ノ之束を苦しめられる。
彼女たちにとってこれほど嬉しいことはないだろう。

狂っている。
今の彼女たちに当てはまる言葉はそれに尽きるだろう。
自分が操られていることを知っていて、人を何のためらいもなく殺し、捕虜に拷問を散々した上に目の前で大切な人たちを殺して、その人も殺して、更には彼女たちがＩＳ学園の恩師である織斑千冬と親友だった篠ノ之箒の死を侮辱して、あまつさえ、それらのことを平然と笑っている。
だが、彼女たちからすればそれが普通で、それ以外はくだらない石ころと変わらないと考えていた。

しかし、この時の彼女たちは思っただろうか。
それが明らかな驕りであり、油断していることを考えただろうか。
だが、その考えがなければ織斑千冬や篠ノ之箒は死ななかっただろう。

次の瞬間、ラウラは一つのエネルギーの塊に吸い込まれるように消えた。
文字通り消えたのだ。

余りのことに残った三人は驚愕した。
その時、シャルロットは逸早く平常に戻り、奇襲だとわかり、撃ってきた方向を見る。
他の二人も何が起こったのかわかり、武器を構える。

「なんて小ずるい手を！」
「でも、何でＩＳが反応しなかったのよ！まさか・・・」
「ハイパー・センサーが使えないから、ロックオンされても気付かないなんて・・・！」

三人は急ぎ、射線軸の方向に走り出した。

砲撃ポイント

「次！ブルー・ティアーズの座標を送れ！」
『了解。ただいま送ります。』

弾は次弾をチャージしながら、セシリアの座標に銃口を向けた。

「（まだか！？）」

弾は若干焦っていた。
この武器のチャージ中は一切の攻撃ができない。
その間にこちらに来られると負ける可能性ある。
だから、内心焦っていた。
敵機影が見えてくる辺りでチャージが終わった。

「当たれよ！」

そう願いながらコジマライフルを撃つ。
コジマライフルからエネルギーが放たれてセシリアに向かっていった。

「この程度・・・！？」

だが、セシリアは旧イギリスの代表である。
ハイパー・センサーが使えなくても回避はできた。
セシリアが回避運動を取ろうとした瞬間、左右からグレネードが飛んできた。
その攻撃は鈴音やシャルロットにも及んだ。
急な攻撃に回避はできずに命中してた。
何が起きたのか分からず、左右を確認すると、砲撃型のＡＣが待ち構えていた。
弾の部隊であるＡＳ部隊である。

「本当に面倒ですわ！」

セシリアは反撃をしようとＢＴ兵器を飛ばそうとしたが、コジマライフルのエネルギーが目前に迫っていた。
当然、回避などはできずにセシリアはエネルギーに飲み込まれて消えた。

一方、鈴音とシャルロットは砲撃の雨から脱出をすると、弾の方に向かって行った。
次の砲撃の前には到着して倒す考えからだった。
砲撃型のＡＣは攻撃力はあっても、機動力で圧倒すればいいから、無視して行った。
しかし、砲撃の雨が追ってきて思うように進まない。

その間に弾は使えなくなったコジマライフルをパージして、マシンガンを装備した。

「残存の甲龍とラファールの撃破に向かう。砲撃を中断して敵の後方に周れ！」

弾の一声と共に砲撃は止んだ。
鈴音とシャルロットは急な砲撃の停止に驚いたが、今が好機と考えてブースターを飛ばした。
そして、砲撃ポイントに到着した二人は攻撃態勢に入る。
しかし、到着した場所には弾はいなかった。
何処だと二人が周りを見回すと、鈴音が複数の弾丸が命中した。

「！？」

撃ってきた方向を見ると、弾がマシンガンを乱射していた。
鈴音は余りの攻撃に動けなくなっていた。
シャルロットは高く空に上がると、アサルトライフルを出して構えた。
鈴音に注意が向いている今がチャンスだと考えたからだ。
目視による狙撃をしようとした瞬間、後方からグレネードが飛んできた。

「く！？」

突然の砲撃の再開にシャルロットは身動きができずに、砲撃を受け続けた。
弾はその隙を見逃さず、左背中に砲身が折られたのコジマキャノンを出して構える。
コジマキャノンはエネルギーを蓄積していき、満タンになった瞬間、

放たれた。
放たれたエネルギーは真っ直ぐにシャルロットに向かっていった。
セシリア同様、グレネードの雨にさらされているシャルロットには避けることはできなかった。

エネルギーはシャルロットの腹部を貫通していく。
シャルロットは何が起きたのか分からず、腹部に手を当てる。
手に付いた血を見て、自分は死ぬんだと理解すると、グレネード集中砲火を受けてＩＳごと爆発した。

「何よ、あんた！？一体何なのよ！？」

衝撃砲を乱射する鈴音だったが、ネクストのクイック・ターンにより、まったく当たらない。
鈴音は余りの強さに怒りを覚えるが、弾は逆に悲しく感じていた。

何故なら鈴音は弾の中学の時の友人であり、悪友でもあった。
その頃は喧嘩はしても仲良く、友情は消えないと考えていた。
しかし、国家解体戦争の時、豹変した鈴音を見た弾は目を疑った。
目の前で高笑いをして、男性を殺しているのを目撃した。

何故だ？

確かに鈴音は子供の時から男性は嫌いだった。
しかし、殺す程、酷い分けでもなかった。
ＩＳの専門家が言っていた『洗脳説』を聞いて、そうだと思った。
洗脳されているなら、説明が付く。

ならば、助けて見せると決めた。
友人として洗脳されたまま死んで欲しくはない。

洗脳している人を倒せばきっと助かる。

だが、現実は違った。
束から与えられた情報で、洗脳だと知った時は嘘だと思った。
精神が歪められているから、敵になったのだと、彼女は語っていた。
なら、今まで何のために戦ってきたのだろうか？

虚と本音を失い、ＩＳを憎む気持ちだけだったが、心の何処かでは友人を助けたかった。
それが無くなったら何が残るのだろうか？
この時から答えが無くなったのかもしれない。
この最後の戦いになっても答えがでない。
だが、ここまで来た以上、せめて友人を安らかに眠らせようと決めた。

弾はマシンガンを乱射しながら鈴音を圧倒する。
鈴音は何とか弾丸の雨から脱出しようと、回避運動を取るが、弾は回り込みダメージを与える。
最後に両背中のコジマキャノンを開き、鈴音の二つの非固定浮遊部（アンロック・ユニット）位を打ち抜く。
その爆発により、鈴音は地面に叩き付けられる。
直ぐに立ち上がるが、構えていた砲撃型のＡＣの砲撃の雨に合う。
大量の土煙が上がる。

「砲撃中止！」

２００発以上を浴びせた辺りで砲撃は止んだ。
砲撃は止んで、土煙が晴れていき、装甲が殆ど無くなった鈴音がいた。

弾はゆっくりと地面に降りると、鈴音の胸部にマシンガンを向けた。
鈴音はまだ意識があるのか、睨み付けて見ていた。

「久しぶりだな、鈴・・・。」
「!?。まさか、弾!?」

この時、鈴音は謎の機体、ネクスト・ストレイドの搭乗者が弾だと知った。
鈴音は高笑いし始めた。

「とんだ同窓会ね・・・」
「ああ、そうだな。先に逝ってろ・・・」
「えぇ、あんたが来るのを待っているわ・・・」

そう言い合うと、弾はひきがね引く。
複数の弾丸が飛び出して、鈴音の胸部を撃ち抜く。
弾丸は心臓を貫き、鈴音は絶命した。

弾は空を見上げて、人知れず、涙を流していく。

分かってはいた。
ＩＳと戦うという事はいずれは友人と戦うことになることを理解はしていた。
しかし、実際に戦うと何も残らなかった。
こんな虚しい気持ちを、もう一度受けると思うと、耐えられるだろうか疑問だった。
だが、戦わなければ生き残れない。
弾は心を決めると、振り返り部隊に指示を送ろうとした。

すると、空から白いエネルギーがＡＳ部隊を襲った。

突然の奇襲を受けて部隊はバラバラになった瞬間、今度は複数の白い斬撃が降って来た。
その余りの攻撃にＡＳ部隊は壊滅した。

真っ白なカラーリングをしたＩＳが降りてきた。
傍から見れば、天使が騎士の鎧を身に纏った姿であり、かつて世界を震撼させた最初のＩＳ『白騎士』の生まれ変わりのようだった。
そのＩＳこそ最強のＩＳ『白式』であり、世界唯一の男性搭乗者『織斑一夏』である。
一夏は弾を睨み付けると、怒りと喜びに歪んだ顔を向けた。

「見つけた！みつけた！ミツケタアァァァ！！」

それは狂った天使の叫びのようだった。

第４話：歪み　前編

エーレンベレク・制御施設

「来たんだね、いっくん・・・」

束はエーレンベルクの発射のために制御室でエネルギーの調整をしていた。
すると、制御室に取り付けてあったレーダーから２機の反応を持つＩＳが現れた。
その現れた２機の反応を持つＩＳが自分の友人の弟だと直ぐにわかった。
何故、１機なのに２機の反応を持っているのか、束はだいたい予想ができた。

「回収しているのは、気が付いていたけど、まさか本当にやるなんて・・・」

束はどうしようもない怒りを覚えた。
何故ならそれは、かつて自分が大切な妹に送ったものが利用されたからだ。
今まで謎とされた２機の内、自分の最高傑作の１機がひどい扱いを受けている。
それも、その機体を扱うのが友人の弟だ。
これを見たら、妹と友人はどう思うだろうか？
きっと自分と一緒に怒っただろう思った。

だが、今ではもう会うことはできなくなっている。
何故なら自分の大切な人たちは国家解体戦争の前に、死んでいるのだから。

あの頃はまだ世界中から逃げていた時だった。
ＩＳの研究が終わり、亡国企業も消えて暇を持て余していた。
暇だなぁ～と感じていると、友人である織斑千冬から電話が来た。

「束、今は暇か？」

友人の唐突なことに少々驚いた。
それも白騎士事件の時以来の優しい口調だった。
束は友人のその口調に心弾んだ。

「うん、うん、暇だよ！」
「そうか。ならこっちに来ないか？暇潰しになるイベントがあるぞ。」
「えへへ～。それは楽しみだね～」

この時、気付けばよかったと束は考える。
白騎士事件以降、千冬は業務的な電話しかくれず、友人としての会話がなくなっていた。
そんな時に久しぶりに優しく声をかけてくれた。
だから、とても嬉しかった。

次の日、束は千冬と合流した後、宇宙に向かった。
宇宙にはコロニー・天上が造られており、新たな生活空間が広がっていた。
しかし、束にはどうでもいい事だった。

自分にとって大切なのは千冬と箒と一夏だけだった。
それ以外はどうでもいい石ころだと感じていた。
コロニー内部に入ると、一夏と箒が待っていた。
二人にも再会して束は更に気分を良くする。

「いっくん、箒ちゃん、久しぶりだね！」
「お久しぶりです、姉さん。」
「はい、久しぶりです、束さん。」
「うん、うん、お久だね～」

束は数年ぶりに会う二人に喜びを隠せなかく、二人を抱き締めた。
二人を抱き締める束を見て、やれやれといった態度で見守る千冬は一息付く。
一夏は千冬が帰って来たのをしり、束を振り解き、千冬に近づく。

「千冬姉！お帰り！」
「ああ、ただいま一夏。」
「これからどうする？ご飯にする？何がいいかな？お風呂は何時にする？布団なら直ぐにしくよ！」

束は一夏の、この状態を見て、またかと思った。
一夏は元々、家族は姉の千冬しかいないため、極度のシスコンになっているのだ。
ふと、束は何かがおかしいと感じた。

「（あれ？何だか、前に見た時より酷くなってないかな・・・？）」
確かに一夏は千冬にたいして極度のシスコンだが、何がおかしかった。
いつもは親が子供に接するような、献身的な接し方だったが、今感じている接し方は気になる女性が一年間、離れていたから大切にする為に積極的な接し方するようだった。
何故だかおかしかった。
ひょっとしたら二人っきりの時は、このような接し方なのかもしれない。
だが、二人っきりの時は良いかもしれないが、今は自分の妹である箒がいるのに、その態度は取るはずがない。
「（どうしたんだろう、いっくん？箒ちゃんと結婚してからはあんまりあんな風にならなかったはずだけどなぁ～？）」
束は色々と考えようとしたが、途中から面倒くさく感じてきたので考えるのを止めた。
束にとってはたいしたことない問題だと思えたからだ。
必要とあれば自分が箒の背中を押してあげればいいことなのだから。
そう思い、箒の方へ目を向ける。
きっと箒は一夏に対して嫉妬の怒りを今晩にでも、ぶつけるだろと思えた。
だが、束は予想を遥かに超えたものを見てしまう。
そこには、姉である自分が見たこともないくらいの嫉妬の怒りを千冬に向けていた。
それは人を呪い殺せるくらいだった。

「（ほ、箒ちゃん？何だか、何時もより怒ってないかな・・・？）」
束は少しの不安を感じた。
何かがおかしかった。
まるで、外見は変わらないが、中身が全くの別人のようだと考えたが、開いても同じものしかなかったような感覚だった。

「（何か、あったんだろうか・・・？）」
そう思うと、言い様のない不安が襲ってきた。
そう束が感じていると、千冬が束に近づいて来た。

「どうした、束？何か、あったのか？」
「え？うん、うん、大丈夫だよぉ～」
「そうか・・・。ならば、良いのだが。何かあったら、私に相談しろよ。私が守ってやるからな。」
「ちーちゃん・・・」

正直、束はとても嬉しかった。
こんなに優しい千冬を束が見るのは白騎士事件が起こるよりもずっと前だった気がした。
すると、一夏がニッコリと笑いながら千冬に近づいて来た。

「その千冬姉を守るのは、この俺だ！」

一夏は強気な発現で、そう宣言する。
その宣言を聞いた千冬は少し呆れた顔をする。

「おいおい、私はお前に守られる程、弱くはないぞ？」
「な！？いいだろ、好きで守りたいのだから！」

その千冬からの手痛い言葉に少し落ち込む一夏。
一夏の宣言を聞いた箒も近づいて来た。
顔付きは先程とは違い、優しい感覚が持てた。

「その一夏の背中を守るのは、この私だ！」

その宣言は一夏の時と同じ位、強気なものだった。
それを聞いて自然と皆で笑いあった。
束は内心、ほっとしていた。
先程の自分が感じた不安はきっと勘違いだったに違いない。
目の前の三人は何ら変わらない、いつもの友人たちと妹だ。

束は後に後悔した。
この時に怪しんで、三人の異変に気付いていれば、何かの対策は取れたかもしれない。
だが、束は気付くことはなかった。
それだけ三人との会話が嬉しかったのだから。

それからは四人で雑談をしていた。
何の他愛ない会話だが、束はとても喜んだ。
ふと、束は自分が呼ばれた目的を思い出して千冬に笑顔を向ける。

「そう言えばちーちゃん。面白いイベントがあるって言ってたけれど、何をするの？」
「うん？あぁ、そのことか・・・そろそろ時間だな。よし、見るか。」

そう言って、千冬は携帯を開いてテレビ画面を出す。
テレビ画面には何処かの会場が映し出していた。
画面の中央には会見やスピーチなどに使われる机が置いてあった。
しばらくして、画面の右側から数枚の紙を持った女性が現れて、机の後ろに立ってカメラの前に立つ。
何をするのかと思い、見ていると女性は持っていた紙を読み上げる。

『こちらは宇宙コロニー・天上から地球の人類に送る。我々人類は劣等種である雄を今まで飼ってきた。子孫を増やすしか利用価値がない存在がかつて男尊女卑を掲げていたのは実におこがましい。そんな時代がまた訪れないよう、私はここに宣言する！劣等種である雄とそれを支持する雌を全て駆逐し、人類の明るい未来を創りあげよう！恐れることはない！我々には神の力に近いＩＳがある！さあ、人類に未来と平和を！』

それを聞いて束は呆れて見ていた。
束からしたら彼女の言葉は「うざい豚どもが、まだ生きているので皆で皆殺しをしよう」と言っているとまったく変わらなかった。
しかし、束は、そんなことよりも腹立たしいことを言われて怒っていた。

「呆れた会見なんか、どうでもいいけれど、私のＩＳを利用したのは許せないねぇ～」

束はまるで、自分の子供を利用した者に怒りと侮蔑の瞳で見ていた。
それを見て、千冬は束を落ち着かせる為に声を掛ける。

「まぁ、落ち着け束。お前からすれば、利用されて腹が立つかもしれないが、これは一つの転機かもしれないぞ。」
「？どう言うこと？」

「なに、簡単なことだ。お前がＩＳの製作者だから誘拐・暗殺の標的になっていたが、これからは宇宙コロニー（ここ）がお前を守ってくれる。何たってここは女性なら、誰でも守るし、自由に私達といてもいいんだぞ。」
「でも、あいつらは・・・」
「分かっているさ。彼女たちも見返りを求めてくる。だが、彼女たちが求めてくるのはＩＳのコアの修復だけだ。」
「？何でそれだけなの？他にも色々と求めてくるよ。絶対に。」
「その点は大丈夫だ。私が根回しをしておいた。彼女達もお前には手は出せない。」
「・・・でも、こんなの聞いて世界は黙ってないよ。」

束の考えでは宇宙コロニーはどの国家よりもＩＳを持っているが、ただそれだけだ。
恐らく、作業用に改造されたＩＳが殆どで、戦闘用のＩＳは極僅かだ。
比べて、相手はかつての白騎士事件のようにＩＳを持っていない訳がない。
戦闘用のＩＳをあるだけ投入してくるだろう。
それも一国家だけではなく、全国家のＩＳが参戦するだろう。
数は御予想、４００機以上だ。
そうなれば、宇宙コロニー側が敗北するのは目に見えている。
しかし、千冬は余裕の表情を浮かべて笑っていた。

「安心しろ、束。お前が考えていることは解決済みだ。それに、だ。」
「？なに？」
「お前に見せたかったのは、こんな会見ではない。もっと面白いものを見せてやる。」

その言葉通り、束にとって、とても面白いことが起きた。
数時間後、宇宙コロニーは1機を除いて全てのＩＳが全国家に攻撃に向かった。
当然、全国家は迎撃のために全ＩＳを投入した。
明らかな戦力差は歴然で、誰がどう見ても宇宙コロニー側が敗北すると考えていた。

しかし、結果はとても信じられないことが起きた。
迎撃に出たＩＳの搭乗者たちが、宇宙コロニー側のＩＳと合流したのだ。
それも1機や2機ではない。
なんと、迎撃に出たＩＳの全てが裏切ったのだ。
それは誰も予想ができないことだった。
裏切り者がいるのではと、誰もが思っていたが、まさか全ＩＳ搭乗者が裏切るなんて誰も思うはずがない。
当然、ＩＳのない全国家は三日で敗北し、その姿を世界から消えた。

この結果を見ていた束は心の底から喜んだ。
何故なら束が大切にする妹や友人、その弟と離ればなれになる原因である国家がなくなったのだから、これを喜ばなくてなんとする。
重要人物保護プログラムだか知らないが、大切にする人達に会えないのなら、国家など滅びればいいと考えていたからなおのこと喜んだ。

それからは宇宙コロニーによる一方的な男性の虐殺が行われていた。
だが、束に取っては全く関係なく、どうでもいいことだと捉えていた。
それに虐殺は人類の歴史の中で当たり前なのだ。
自分には大切な人達がいればどうでもいいのだから。

そんな日々が続いて、ある日のことだった。
あるＩＳの部隊が消息を絶ったのだ。
その部隊は旧国家軍の残存勢力の壊滅が目的で敵基地に向かっていた。
最初は敵がＩＳの通信システムを妨害していると、考えていたから心配していなかった。
ＩＳに勝てるのはＩＳだけなのだから旧国家軍に勝てる要因があるはずがなかった。
だが、通信が無くなり、三日が経ったので流石におかしいと判断された。直ぐに調査隊が現地に派遣されたが既に遅かった。

そこには、事切れた搭乗者と無惨な姿のＩＳがあった。
いったい何があったのか、直ぐに破壊されたＩＳのコアから情報の引き出しが行われていた。
しかし、そのコアは完全に破壊されていた為に情報の引き出しができなかった。
だが、後に情報が入ってきたのだ。

ある時、１２機のＩＳ部隊が謎の部隊に襲撃された。
その部隊はＩＳによく似たパワードスーツを装備していた。
その数は１０００機に及ぶ大部隊だった。
部隊は３機を除く全てが破壊されたが、その戦闘情報が手に入った。
全身装甲（フルスキン）でＩＳの半分の性能しかなかったが、かつての『白騎士事件』の様に、数を圧倒的な性能で勝利を得ることができなくなった。
この事は束を除く、全ての宇宙コロニー側の人間に衝撃を与えた。
ＩＳは無敵ではないのか、性能を圧倒をする数が崩壊したのではないのかと大騒ぎになった。
しかし、それを嘲笑う女性が静観して見ていた。

束である。
彼女は謎の機体の性能限界がどこまでか、大体予想ができた。
まず、大きいのはＩＳの様なシールドバリアーと絶体防御、粒子化機能が存在しないことだった。
シールドバリアーと絶体防御が存在しないから、搭乗者を守る為に全身装甲にしているが、所詮は木の鎧と鉄の鎧との差がある。

被弾すれば確実に搭乗者は死を向かえるだろう。
また粒子化機能がないから、両手と背中に武器を二つずつしか装備されていなかった。
だから、弾薬が切れると戦闘行動ができない。

その他にも、欠点を挙げれば両手の数では足りないほどだった。
束からしたら、ただの芋虫が鳥に喧嘩を売るようなものだった。
それを一々騒いでいるのは馬鹿馬鹿しく感じられた。
後に、このことを理解した宇宙コロニーの人間は何もなかったように振舞っていた。

それ後は地球側と宇宙コロニー側に別れて戦争が始まった。
コロニー側は性能による圧倒する作戦で臨み、地球側は数による圧倒する作戦で臨んだ。
最初は奇襲にあったコロニー側だったが、性能による圧倒で戦果を挙げるが、地球側の数は以上であり、約１０００００００を超える大部隊と展開できた。
最初こそ有利かと考えた勝利も時間と共に劣勢に立たせられた。

そのことがあり、コロニー側はある兵器で起死回生を得るために地球側に与えること決行した
その兵器は人類の忌むべきものであり、二度と使用されないはずだ

った。
しかし、それは前に存在した国家の考えであり、コロニー側は簡単に使用した。

その兵器は核である。
核兵器を使用したことにより、戦況はコロニー側に傾いた。
しかし、その代償は余りにも大きすぎた。
核は地球全体を汚染してしまい、人類が住むことはできなくなっていた。

これぱかりは束でも怒りを覚えた。
いくら宇宙コロニーが有っても、まだ、人類が宇宙に対応できておらず、今の時点で地球を滅ぼすのは間違いである。
これでは人類が滅びてしまう。
そうなれば自分が大切にする人達にも被害が及ぶ。

この事に束は怒りをぶつける為に宇宙コロニーの代表者に罰を与えることを決めた。
もちろん、殺したいとも考えたが、それは千冬が許さないだろう。
しかし、ただでは終わるつもりもない。
だから、ちょっとした罰を受けてもらう。

そう思い、音声付監視カメラから代表者の個人情報を探った。
そこで束はあるデータを見つけた。
それは代表者と千冬の会話が記録されたデータだった。
記録日を見ると、核兵器の使用前の前夜だった。

『・・・核を使うって？』
『ああ、そうだ。』

会話からして、核兵器を使うかどうかの話し合いのようだ。
しかし、束は疑問に思った。
千冬なら簡単に説得できたはずだ。
なのに、核兵器は使用された。
これは大きく矛盾している。
そう束が思っていると、会話が続く。

『私は別に構わん。あんな社会の秩序を守れないゴミどもが死のうが、消えるならば地球がどうなろうが構わん。むしろ、それが地球のためになるかもしれないしな。』

この言葉を聞いて、束は嘘だと思えた。
あの千冬が、友人である千冬が、こんな事を言うはずがないのだから。
彼女が核兵器の使用を許すはずがない。

『なら、明日から使用だな。ふふふ、ゴミどもめ、私が立てた秩序を壊しよって！地獄に落としてやる！』
『ふん、それには同意見だ。社会とは群れで生きていくものだ。それが守れないのなら人間以下のゴミだな。』

おかしい、千冬はこんな事は言わないはずだ。
自分の知っている千冬はこんな事はけして言わない。
なのに、映像の千冬は嘲笑うかのように言っていた。

『はは、流石は超現実主義だな。調整したかいがあった。』

その言葉を聞いて、束は思考が停止した。

「（今、この女は何て言った・・・？調整した・・・？）」

そこで束は、千冬が操られていると気が付いた。
しかし、それならば何故千冬の前で言うのかと疑問に思った。
普通は操っていることを本人には言わないはずだ。
なのに、代表者はそんなことは関係なく、千冬を目の前にして言っていた。
すると、千冬はにこにこと笑いながら立っていた。

『ああ。だが、調整したのは私だけでなく、箒や一夏、宇宙コロニーの人間全員だろ？束は除くがな。』

その言葉に、束は完全に凍りついた。

「（イマ、チーチャンハナニヲイッテイルノ・・・？ホウキチャンヤイックンガ・・・？）」

束にはとても理解ができなかった。
自分が操られているのを知っており、友人の妹と自分の弟も操られているのを知っている。
それを怒るどころか、笑っていた。
もう聞きたくないのに、止めるための指が動かない。

『まったく、天才はよくわからん。便利なコア・ネットワークとの接続を切っているＩＳを使うなんて、馬鹿馬鹿しく思えるし、思い通りいかんな。』
『それは愚痴か？天才・篠ノ之束を調整できなかったからか？あれでも私の友人だ。怒るなよ。』
『ふん、黙れよ人形。お前はあの女の機嫌でも取っていろ。』
『わかっている。ちゃんとやればいいのだろ？』
『わかっているなら、消えろ。』

そこで束は見るのをやめた。
それ以上聞いてしまうと、精神が持たなくなってしまうからだ。
何時からだと考えると、恐らくは自分が来た時からだと考えられる。
そう思うと、今まであった幸せな時間は嘘だと思い立ち、涙が溢れてきた。

「やっと・・・かえって・・これたのに・・・」

束からしたら、三人と離れ離れの時はとても苦痛だった。
しかし、束は離れなくてはいけなかった。
ＩＳを発表したことにより、束の知識と命を狙う人間は多かった。
その被害が他の三人に及ばないよう、全ての国家から逃げていた。

定期的に会話や直接会うこともできたから、それほど苦でもなかった。
しかし、やはり何時も一緒にいたかった。
寂しいのはどんな人間でも耐えることはできないのだから。
また、昔のように三人でいたい。
いつか叶うことを信じていた。

そして、それが叶う日がきたのだ。
昔みたいにいつでも三人といられた。
幸せに日々が帰ってきたのだ。

だが、現実は違った。
恐らく、自分を呼んだのは『ＩＳの調整のため』だろう。
そして何故、千冬はあんな風に変わったのか考えてみた。
すると、ある単一能力を思い出した。
その単一能力は戦闘にはまったく向いてないが、特殊な能力だった。

能力名『伝心転換』
確かに、補助の能力で精神を扱えるこの単一能力なら可能だ。
それに掛かると、心を歪められて二度と戻ることはできない。
しかし、一人や二人は可能でもＩＳ搭乗者全員は無理だ。
何かが相乗効果を持てば可能だが、そんな設備があるはずがなかった。
例えるなら、順次展開しているＩＳがある。
その大きさは全ＩＳ中最高クラスの大きさで軽く見ても、大都市位の大きさが必要である。

そこで束はあることを思い出す。
それは宇宙コロニーが緊急時に予備のエネルギーためにＩＳのコアを取り付けることができる。
それも、特殊な機構を積んだコアでなければならない。
その機構を積んでいるのは、たった１機のみだった。

宇宙コロニーの代表者のＩＳだ。
確かに、映像の会話からして、彼女しか考えられなかった。
ふつふつと怒りが溜まってきた。
そう思い、取り付けてある窓を見る。
そこから広大な宇宙が良く見えていた。
そして代表者の部屋も宇宙と繋がっているのを思い出す。

「ふ、ふふふ、あはははは！」

そこで束はあること思い付く。
バカで幼稚な発想だが、今考えられるものの中で一番甘美なものだった。
そう思うと、笑いが止まらない。

もはや止まるつもりはない。
止めてくれる人たちはもういないのだから。

そして決行した。
復讐をすることを・・・

第5話：歪み　中編

束は広大な宇宙の中にいた。
背には、青く輝いている地球があった。
しかし、例え青く輝いていても、もはや汚染された星で生命が死滅する星と化していた。
そして、目の前には無限に近い宇宙と巨大な宇宙コロニーがあった。
そこには、約２０００人の移住していた。
アニメや漫画では何万人の人間が住んでいるイメージがあるが、実際には多くは住めない。
理由としてエネルギーの問題、食料の問題などが上げる。
これらの問題を抱えているため、今でも永住ができる地球が必要だった。

だが、それはもう存在しない。
何故なら人類が自らの手で地球を汚して住めない土地を多く造り出した。
もはや人類は滅びを待つことしかできない。

しかし、今の束にはそんなことは関係なく、ただ復讐を成し遂げるだけだった。
自分の大切にする人達の心を歪めた張本人を確実に殺すことで心の潤いを求めた。

束自身、自らが一般の人間と違い、歪んでいるくらいは理解していた。
だが、それが自分の短所であり、長所でもあった。
でなければ、ＩＳが世界に広がることはなかっただろう。
常人なら、ＩＳが世界に混乱をもたらして、現在の状態も見えてい

ただろう。

しかし、それがどうだと言うのだろうか。
確かに現状を作る切っ掛けを作ったのは束であろう。
しかし、現状まで導いたのは人類だ。
人類の愚かな行いが年月を経て、現在の未来になったのだ。

所詮は知識を得ただけの生き物。
滅びる時も綺麗ではなく、醜い欲望をさらけ出して逝くのだろう。

それはいい。
しかし、それに自分の大切な人達も巻き込むなら、例えどんな人間だろうと容赦なく殲滅するだろう。
歪んでいると人は言うかもしれないが、実の所、束は一番人間の内面を表に出しているのだろう。
だからこそ、周りの人間は彼女を理解したくなく、目を叛けるのかもしれない。

だが、そんな束を理解していた人間はもういない。
だから、その張本人を抹殺することを止めない、止められない。
それをするには理解のある人間が必要だ。
だから、止められない。

束は自らが展開したＩＳに収納してあるレーザーライフルを出して構える。
狙うは宇宙コロニー代表者の部屋。
丁度、代表者は仮眠を取っているため、楽に終わる。
束は狙いが定まり、引き金を引いた。
ライフルから放出されたレーザーは一直線に向かっていった。
直撃は免れぬはずだった。

しかし、結果は全く違った。
直撃する寸前、白い光が下から現れて、レーザーの斜線軸に一瞬で移動した。
それは左手に装備されていたエネルギーの盾を向けるとレーザーが当たり、かき消した。

「！？」

束は驚愕した。
確かに襲撃のさいに防衛部隊のＩＳが現れるのは予想ができた。
しかし、問題は攻撃をかき消したＩＳと搭乗者に問題があった。

そのＩＳは白く、かつて束が心血を注いで手掛けたＩＳのコアを搭載したＩＳだった。
そして、その搭乗者は友人の弟であり、自分の大切な人の一人だった。

「まったく、束さん。駄目じゃないですか。代表者を撃ち殺そうなんて・・・。」
「いっくん・・・？」

織斑一夏。
第四世代ＩＳの試作機の搭乗者であり、千冬に次ぐ実力者である。
束にとって予想外の人物が現れて、驚愕することしかできなかった。

束とて、がむしゃらに襲撃した訳がない。
一夏や箒、千冬が地球で戦闘を行なっていることを確認して、念入りに計画の上で実行したのだ。
不備なんてあるはずがなかった。

ないはずだった。
しかし、今、目の前にいる一夏は本人で見間違うはずがなかった。
一夏はため息を出すと、ニッコリと笑っていた。

「いやぁ～、千冬姉の予想していたとうりだよ。本当、最高の姉を得たよ。俺は。」
「予想していた・・・？」

一夏はクスクスと笑い出した。
その笑いは思っていた通りで笑っているのではなく、尊敬している女性に誉められるから笑っているようだった。

「そ、千冬姉が『束なら私達が調整されていたことを知れば、確実に代表を殺すだろう。そうなってば困るから、ずっと見張っていよう。』ってことになってんだよ。ごめん。黙ってました。」

それを聞いて束は一瞬で凍り付いた。
それが本当なら昨日、今日のことではない。
恐らくは、宇宙コロニーに来てからずっと見張られていたのだろう。
それも一夏だけではなく、千冬と箒も入っているのだろう。

「でも、作戦を無視してここまで戻って来るのに半日掛かるはずだけどなぁ・・・」
「あぁ、あれは嘘だよ。束。」
「！？」

後ろから声が飛んできたので、束は振り返ると、そこには自身の搭乗する『暮桜（くれざくら）』を駈る千冬と第四世代ＩＳの『紅椿（あかつばき）』を駈る箒がいた。

「ちーちゃんに箒ちゃん・・・？」
「ふん、何を驚く必要がある。私はお前と幼なじみだろ？お前の考えくらいは予想していたさ。」
「まったくですよ、姉さん。私達が姉さんをほっとく程、間抜けではありませんよ。」

そこで束は自分が気を緩く持っていたことに気が付く。
国家から逃げていた頃なら、これくらいの予想ができていたはずだ。
しかし、三人といることに気が緩くなり、すっかりはまってしまった。
束はにっこりと笑って三人を見ていた。

「三人とも邪魔しないでよ～あの女は三人の心を身勝手に歪めたんだよだから、殺してやるんだよ～」

束自身の身勝手な考え方かもしれないが、大切な三人のためなら当然のことである。
しかし、そんな思いを聞いた三人は大きく高笑いを始めた。
まるで、束の思いをバカにしているようだった。

「何がおかしいの・・・？」

そんな三人の高笑いに束は理解することができなかった。
すると、千冬が高笑いを止めて、ニッコリと笑って束を見る。

「心を歪めた？違うな。私達はお前に近付いただけだ。自分に正直に生きているだけだ。でなければ、お前がＩＳを発表なんかしなかっただろう？それと変わらん。私は現実主義が表に出たに過ぎない。まぁ、常人からは私も歪んでいるかもしれないな。」

そこで束は千冬が何故、女尊男卑支持者でもないのにコロニー側に味方をしているのか理解する。

現実主義。

一般的に幻想やおとぎ話を信用せず、現実にあるものしか信用しない考え方である。

こう言った考え方は、旧国家の軍事バランスや経済バランスの支えになっていた。

しかし、そういった考え方だけではなく、光があれば闇があるように闇があった。

例えば自らの命と国のためなら手段を選ばない権力者や、正義のためなら悪を滅びて当然な考え方が当てはまる。

その考え方は一般的に歪んでいるとは言わない。

それもあったのか、世界はＩＳの存在を受け入れた。

しかし、中身ははっきりと歪んでいた。

それも常人が気が付かないほどゆっくりとした歪みである。

確かに千冬は、そう言った現実主義の一人であった。

しかし、千冬の考え方はけして歪んでいるものではなく、どちらかと言えば普通の方であった。

だが、それが増幅されればどうなるのか。

結果は見て取れる。

千冬は現実的な考え方で宇宙コロニー側に付いたのだ。

確かに誰も、圧倒的な絶対者（ＩＳ）に逆らう者はいないだろう。

そんな考え方はバカか、同等の力を持つ者か、自殺願望者くらいだろう。

だから、千冬は簡単に国家を裏切った。

常人なら腰抜けと罵るだろう。
だが、好き好んで死にたい人間は少ないだろう。
そこを付いたのだから、なかなかの盲点と言えよう。

だが、束は疑問に思う。
確かに千冬はわかるが、箒や一夏はそういった傾向はなく、むしろ抗う性格だった。

「だけど、いっくんや箒ちゃんは・・・」
「ああ、俺たちは自分の大切なもののための努力を調整されたんだよ。俺の場合は千冬姉のために戦える。例え、世界の全てを敵にしてもだ」
「私は一夏のために戦える。例え、それで何人死のうが構いません。」

そこで束は気が付いた。
一夏や箒が掛かったのは、人類の歴史に記録されているよくある争いの火種である。
それは人類が切っても切り離せなく、何度も内戦や戦争の原因の元であった。

過激な思想
これまでも人類は過激な思想により、争い合い、いくつもの血を流してきた。
それはＩＳの登場からも変わらず続いていた。
中には、代表者が言っていたように、ＩＳを神格化する者もいれば、その存在を否定する者もあった。
現在の地球側とコロニー側の戦争もそれに当てはまる。

かたや、生き残るために戦い、かたや、女尊男卑の思想のために戦っている。
そう考えれば現在の戦いは実に不毛な戦いだろう。
しかし、人類にとってはもはや無二の友のような存在だった。
今更切り離すことはできないだろう。

変わって、一夏と箒はとても当たり前の思想だった。
偶像や特定の人物を神格化させることはよくある。
例えるなら、さるアイドルの熱狂的ファンがいる。
そのアイドルにはライバルがいて、邪魔になる。
なら、ファンがやることは一つ、ライバルを消すことだった。
手段は色々あるが、一番は相手を殺すことだった。
その考え方は、箒や一夏が当てはまる。

しかし、疑問が残る。
それが本当なら、一夏は代表者を殺すだろう。
洗脳と言っても、代表者を心酔しているわけではない。
一夏は千冬に心酔しているのだから。
何せ、彼女は千冬の事を『人形』と罵ったのだから。

「・・・なら、どうしていっくんはあの女を守ったのかな～？ちーちゃんが、あの女に利用されているのは許せないはずだよぉ～。」
「あぁ、腹が達し、何度も殺してやると考えたさ。けどさ、千冬姉に殺すなと言われているから殺さね。千冬姉に嫌われるのはいやだしな。」
「ふん。私に頼めば直ぐにでも殺してやるのに、頼まないからいけないんだ。」
「だから、駄目だってば！千冬姉に怒られるのは俺なんだぞ！」
常人では理解できない会話を二人はしていた。

熱狂的ファンが歪んでいると、このような形になるのだろうか。
束は、そこまで三人を歪めた代表者により怒りを込み上げていた。
その束の思いを読んだのか、千冬は笑っていた。

「束、まだ私たちが歪んでいると思っているな？確かに、いきなり私たちが変わったのを理解をするのは無理だろう。しかしなぁ、私たちは別にお前の敵になった覚えはないぞ？それならば、とうの昔に殺していたさ。だが、殺していない。それに、お前を利用もしない。なに、私たちは単純にお前といたいだけだ。あの『白騎士事件』になる前の私たちに戻りたいだけだ。」
「・・・！？」

そう言い、千冬は手を差し出した。
それは甘い誘惑だった。

「だから、この手を取るだけでいいぞ。お前は何も気にせず、ただ私たちといればいいのだから。単純なことだろう？この手を取るだけでいいのだぞ？後は気にせず、これからも一緒にいようじゃないか。」
「・・・」

それはとても甘い毒である。
きっと、その手を取ればなによりも楽になるだろう。
何よりも幸せで、楽しい暮らしが待っているだろう。
それが手で取るだけで手に入るのだ。
束は少し考えた後、ゆっくりと口を開く。

「・・・うん、うん。確かに、その方が楽しいかもねぇ～」
「なら・・・」
「ふざけないで・・・」

「！？」

千冬は束からの拒絶に驚いた。
自分の知っている束なら必ず手を取ると考えていたからだ。
だから、束が拒絶する理由がわからなかった。

「何故だ・・・？」
「そんなの決まっているよ～。もう私の三人じゃないからだよ。それだと、私の幸せが手に入らないからだよ。」

その余りの言葉に千冬は呆れていた。
確かに自分たちは束が知っている三人ではないかもしれない。
だが、自分たちの後ろには最大勢力がいる。
それを敵に回しても戦う理由はないはずだ。
だから、千冬は束の言葉に呆れたのだ。

「・・・考え直せ。お前では私たちに勝てないぞ。」
「ふふん、それはどうかな～」

もはや、こうなっては戦うしかない。
一夏、千冬、箒はＩＳの武装を取り出した。
それに対して束はレーザーライフルをしまい、浮遊パネルを出して何かを入力していた。

千冬の手には『雪片（ゆきひら）』、一夏の手には『雪片弐型』が握られていた。
一夏と千冬が束に一瞬で接近した。
ＩＳの瞬間的に移動する技術、『瞬間移動（イグニッション・ブースト）』である。
箒は二人と違い、真上に上がると、紅椿専用の遠距離武装『穿千（うがち）』を出して構える。

三人は遠距離、至近距離を同時に捉える。
この状況下で束が勝つ見込みはないだろう。
しかし、束が最後にボタンを押すと、三人の動きが止まった。
いや、動けなくなったのだ。

「束、貴様まさか・・・！」
「ふふふ、残念だったね、ちーちゃん。『強制戦闘停止プログラム』を使わせてもらったよ。」

強制戦闘停止プログラム。
ＩＳの戦闘行動を強制的に中断させるプログラムである。
これを使えば例えどんなＩＳでも戦闘行動はできなくなる。
ただし、停止できるのは戦闘に必要な行動だけであり、搭乗者の生命保護は守られる。
そのため、ＩＳは展開状態のままである。
千冬は舌打ちをして、束を睨み付ける。

「くそぉ！卑怯な・・・！」
「卑怯？人類史上、卑怯がなかったなんてないんだよ？」

束は然も、当然のように言い放つと、もう一度レーザーライフルを出した。
エネルギーが充填して、後は引き金を引くだけだった。
自然と束は笑いが込み上げる。
それは、自分の心が満たされると、確信を持てたからだ。
持てたはずだった。

次の瞬間、レーザーライフルが４つに切断された。
束はレーザーライフルから離れると、充填していたエネルギーが爆

発した。

「いったい、なにが・・・！」

束は何が起きたのかわかず、周囲を見渡した
しかし、束は、それを理解することなく切られた。
そこで束は、それが何なのかを理解する。

一夏である。
強制戦闘停止プログラムを受けて、動かなくなったはずの一夏が動いて攻撃をしてきたのだ。
次に束が感じたのは、何故一夏が動いているのかと疑問に思った。

しかし、束が疑問を取り払うよりも速く、紅いエネルギーの塊が叩き付けられた。
それが紅椿の『穿千』の攻撃だと理解した時、束は地球の重力下に入っていた・・・

第6話：歪み　後編

束が地球の重力下に入ったのを三人が確認すると、笑い出した。
その顔には、焦っていた表情が微塵も感じられなかった。

「見たかよ、束さんの顔！」
「ああ！何が起こったのか理解ができないって顔だったな！」
「あんな慌てる顔は久しぶりに見た！本当に傑作だ！」

三人は狂ったように笑い続いた。
先程、友人であり、姉妹であり、義理の姉である束を地球に落としたのに、まるでゴミを捨てて、すっきりしたような笑顔をしている。
常人では理解がとてもできず、文字通り狂っていた。

だが、それはどの人類の時代でも同じで、それが表に出てきただけだ。
それに、今の時代に三人を咎める者達はいるはずがない。
三人は笑うのを止めると、お互いの顔を見合う。

「しっかし、束さんは生きているかな？あれは死んだと思うよ。」
「確かに、な。あの状態で大気圏突入だ。下手をしなくても死ぬな。」

一夏と箒は束の安否を心配していた。
しかし、その目には身内の心配ではなくて、丁の良い道具を心配しているようだった。
その言葉に千冬は鼻で笑った。

「一夏、箒、お前達は何かを忘れていないか？あいつは篠ノ々束だ

ぞ？あれぐらいの状況は予測できる。」

それを聞いて二人はほっと喜んだ。
だが、次に感じたのは少しの不安要素だった。
何故なら地球には自分達、宇宙コロニーの人間に敵対する武装勢力がいるためだ。
もしも、東が武装勢力に味方していた場合、確実に復讐にくるだろう。
負けることはないが、余計な仕事が増えてしまい面倒なことになる。
千冬は、そんな二人の考えを読んでいたのか、笑っていた。

「安心しろ。既に落下ポイントには部隊が向かっている。直ぐに捕まるか、死体のどちらかがくるだろう。それまで食事するか。」
「お！それは良い考えだよ！食事なら俺に任してくれよ！」
「一夏の手料理か・・・楽しみだ。」

一夏の手料理が食べられると聞いて箒は喜んだ。
しかし、一夏は箒のために調理をするわけではない。
あくまでも千冬のために調理をするのだ。
箒はついでに作るだけで、少ししか作るつもりだ。

事実、今の一夏は箒のことが死ぬほど嫌いだ。
だが、姉の手間へ、仲良くしている振りをしていた。
そうでなければ箒は死んでいただろう。
だが、それがなくなれば確実に殺していた。

箒は一夏といれれば後はどうでもよかった。
だから、実の姉の束に止めを刺しても平然としていた。
それどころか、姉よりも一夏の手料理が大切だと考えている。
だが、そんな箒も一夏の嫌いなことがある。

それは千冬を特別に見ていることだった。
本来なら自分のものである一夏に害虫（女）を近づけたくなかった。

しかし、彼女は一夏の姉。
彼女を殺せば、確実に一夏に嫌われる。
それだけは嫌だから我慢していた。

そんな二人の心境を無視するように千冬は地球を見る。
地球は青く美しかった。
恐らく、この世のどんなものよりも美しいだろう。

だが、千冬には醜く見えていた。
何故ならば、現社会のトップである宇宙コロニーの体制を否定する者たちがいるからだ。
社会が決めた『男性は死ぬべき』ということに反対していた。
理由は『生きたい』からだという、理性と言うよりも本能のようなものに従っている。
本当にくだらない理由で戦っている彼ら、男たちは死んで当然だと考えていた。

社会とは群れだ。
その社会が、統率を守るために犠牲を求めるなら死んで当然なのだ。
なのに、それを『生きたい』からとくだらない理由で戦いを挑んできた。
本当にくだらない男（ゴミ）たちだと思った。

そんな男（ゴミ）たちの巣窟に落ちていった友人。
彼女もくだらない理由で宇宙コロニーに反逆した。
それも『友人（私たち）を調整』したからだということらしい。
これもくだらない理由だ。

その程度のことで社会に反逆したのだ。
思えば、『白騎士事件』もくだらない理由で発表していた。
理由が『異常な自分でも世界に認めて欲しかった』からという子供の発想だ。
本当にくだらない人間だと千冬は考えていた。

そして、そんな束に振り回された人生もこれで終わると確信した。
これからは自分の意思で世界を変える。
もっと理想的な社会を創り、社会に貢献しよう。

この時の彼女は、そう思っていた。
半年後、千冬はある機体に敗れ、命を落とした。
その名はネクストＡＣ『ストレイド』――

地球

地表に巨大なクレーターができあがっていた。
そのクレーターの結果、周囲には砂に埋もれて、小さな砂漠が出来上がっていた。
その中心点から砂に埋もれている束が出てきた。

「いやぁ～、驚いたねぇ～。まさか、制御化から外れるＩＳがいるなんてね～。」

彼女はつい先程の友人達との戦闘を気にする事なく、ニッコリと笑っていた。
束は浮遊パネルを出すと、何が起きたのか調べ始めた。

何故、ＩＳが強制戦闘停止プログラムを打ち破ったのか、それが彼女の好奇心を動かしていた。
数分間ほど調べた結果、創造者の制御プログラム事態が完全に無効にされていた。
それも白式や紅椿だけではなく、全てのＩＳが無効になっていた。

「むむ！これはどういうことかなぁ～？」

束にとっては想定を遥かに越えすぎた。
それも創造者の束よりも、ＩＳが主導権が上になっていた。
原因は自己進化によってＩＳが制御化から外れており、制御不能になっていた。

これは由々しき事態である。
これでは如何なるＩＳも制御できず、宇宙コロニーに勝てる要因がなくなっていた。
束は少し困った顔をして苦笑いをしていた。

「・・・あはは、まさか自分の造ったものに裏切られたなんてねぇ～。飼い犬に噛まれたってこう言うことかなぁ～？」

そう束は陽気に笑い出した。
しかし、その笑顔には力はなく、誰が見てもやせ我慢であった。
ふと、束の手元に水滴が落ちてきた。
雨かと思い、空を見上げるが雨は降っておらず、夕暮れの赤い空が広がっていた。
ならば、この水滴は何だろうかと考えて顔を触る。
そこで束は、これが雨でなく、自分の涙だと理解する。

「ふぇ・・・うぇん・・・！」

そこで束は我慢することができず、涙を流して泣き出した。
本当は、あの時に三人の言うことを聞いて手を取っていれば良かったと思えた。
でなければ、こんなにも辛い思いはしなくてすんだのにと。

しかし、束はそれをしなかった。
手を取っていれば、確かに辛い思いはしなくてすんだかもしれない。
しかし、手を取っていれば、本物の三人を裏切っていた。
だからこそ、手を取らなかった。
それが千冬や箒、一夏との思い出を守ることだと考えていたからだ。

しかし、同時に手を取れば良かったと考えてしまう自分がいた。
だが、彼女は拒絶した。
今までの様に自分が信じていた生き方を選んだのだから。
だからこそ、後悔していた。
あの手を取ればこんなに辛い思いをしなくてよかったかもしれないと。

そして、心血を注いで造り出したＩＳによる創造主を裏切りがより彼女の悲しみを大きくした。
彼女にとってＩＳは唯一、自分の異常な人格が世界に認めさせた最高傑作だ。
今まで彼女を認めてくれたのは箒と千冬と一夏だけだった。
理由は人格的な難有りな自分自身だ。

しかし、そうではなくて、世界が自分を理解できないだけだと思い立った。
そのために彼女はＩＳを造り上げた。

人類が自分に適した環境を作るように、自分も作ることにした。
結果は失敗したが、ある程度まで環境を作ることができた。

だが、それすらも彼女を拒絶した。
恐らくは、進化の途上で彼女の存在が邪魔になり、一切の干渉ができないようになっていた。
それもプログラムを起動させた瞬間に決まったようだ。
簡単に言えば、彼女は見捨てられた。

もはや、彼女には何も残っていない。
友人も、その弟も、実の妹も、最高傑作もない。
そんな彼女が最後に考えたのは死ぬことだった。

それは当然な発想だろう。
世界中は核に汚染されて、とても人間が生きていくことはできない。
更には、生きていく意味もなくなっては生きる気力もない。

だから、束は自らの命を断つことに何の未練もなかった。

後悔はあるが、もはや自分には何もできない。
三人がいない世界などないのだから。
ＩＳの小型ナイフを出すと自分の首に刃を向けて切り付けようとした。
その時、実弾兵器の弾丸がナイフに命中し、ナイフを破壊した。

「！？」

束は何が起こったのか分からず、周りを見渡すと１０機以上のＩＳ部隊が浮遊していた。
そのＩＳ部隊は全てが量産機のラファール・リヴァイヴであった。

その内の1機が束に近づいて来た。
恐らくは隊長機だ。

「困りますよ、束様。折角、貴女様を御迎えに上がりましたのに・・・。勝手に死なないで下さい。」
「何だよ、お前。邪魔しないでよ。鬱陶しいから消えろ。お前たち、人形と話すだけ無駄なんだよ。」

隊長機が気さくに束に話し掛けてきたが、当の束は邪魔をされて苛立っており、声を掛けた隊長機に理不尽な怒りをぶつけてきた。
しかし、隊長機は顔色をまったく変えずに、それを聞いていた。
束が言い終えると、隊長機はため息を吐くと、にっこりと笑いかけてきた。

「まったく、私に当たらないでください。それよりも御早いお帰りをお願いしたいのですが・・・。」
「声を掛けるな、人形。うざいから喋るな。お前みたいな・・・」
「うるせぇぞ、ゴミ女！捨て犬の分際でぎゃあぎゃあと、うるせぇ！」
「！？」

いきなり怒りを露にした隊長機が束に怒りをぶつける。
束は一瞬、たじろいでしまったが、負けじと隊長機を睨み付ける。

「てめぇみたいな、メス豚が千冬様の友人だと思うと、吐き気がする。それだけでなく、あのお方の崇高なる夢を否定した！それだけで死罪値するのに、千冬様は連れて帰って来いと言ってきた！てめぇのせいでストレスが溜まるだろうが！」
「うるさい。喋るな、人形。お前には関係ないだろう。」

隊長機は理不尽な怒りを束にぶつけてきた。
束は負けじと言い返すが、泣き疲れで言葉に力が入っていなかった。
そんな束に隊長機は言ってはならない言葉を言ってしまった。

「千冬様に捨てられたゴミがうぜぇんだよ！」
「！？」

それは、今の束にけして言ってはいけなかった。

「てめぇは捨てられただよ、千冬様になぁ。千冬様もてめぇを捨てられて清々してたぜ。」
「・・・黙れ。」

隊長機の言葉に束は怒りで震える。
そんな束を理解せず、隊長機は中傷的な言葉をぶつけてきた。

「だいたい、てめぇが造ったＩＳのせいで千冬様は操られたんだろ？それを他人のせいにして裏切ったら、捨てられても仕方ないよなぁ。自業自得だもんなぁ。」
「黙れ・・・。」

束は自然と手を握り締めて拳を作る。
拳を作った手には赤い液体が流れて、一滴二滴と地面に落ちる。

「てめぇのせいで、皆は操られたんだよ。」
「黙れ！」

その言葉で完全に怒りを露にした束はグレネードランチャーを出して隊長機に撃ち放った。
グレネードは隊長機に命中すると、大きな爆発を起こした。

爆発で黒煙が上がり、その中から束が飛び上がる。
束はグレネードランチャーをしまうとガトリングガンを出して乱射した。
ガトリングガンにより弾幕が張られる。
黒煙が晴れ、隊長機が姿を露にした。

「ははは！やっぱりこうなるか・・・。おい、お前ら！やっちまえ！どの道、捕獲が抹殺のどれかだからな、とっとと殺ちまえ！」

その号令と共に、ＩＳ部隊が一斉に攻撃を開始した。
次々とライフル、マシンガン、ロケットランチャーを撃ち出してきた。
束は攻撃を避けながら弾幕を張り続けるが、多勢に無勢。
一撃、二撃とダメージが蓄積する。

ふと、束は思った。
このまま、彼女達に殺されれば楽になると。
そう思うと、回避しているのが馬鹿馬鹿しく感じた。
先程、自分は自殺を考えていたのに、何故、生きようとするのか。
そう考えて、回避するのを止めようとした正に、その瞬間だった。

六つの閃光がＩＳ部隊を襲った。
その閃光が複数のＩＳを吸い込み、消し去っていた。
閃光が消え去ると、同時に弾丸の雨がＩＳ部隊を襲う。
いったい何が起きたのか、束を含むＩＳ部隊が撃ってくる方角を見る。
そこには、ＩＳを保有者の全員が玩具と小馬鹿していた、謎の機体がライフルで射撃しながら突撃をしてきた。
それも単機である。

今までは性能の低さを複数の部隊がＩＳを単機でいるところを攻撃するだけだった。
しかし、その機体は単機で突撃をしてきたのだ。
はっきりと言って、自殺行為もいいところだ。

しかし、何かがおかしかった。
その機体のスピードもさることながらも、目撃されている機体達よりも一回り大きく、速かった。

何よりも、その武装の攻撃力が異常だった。
先程の閃光も恐らくはあの機体のものであり、その証拠に背には六つの砲身が装備されている。
そして、現在射撃に使用されているライフルは弾丸が命中したＩＳを次々と撃破していく。

当然、ＩＳ部隊は応戦に入る。
ライフル、マシンガン、ロケットランチャー、ミサイルを撃ち出す。
しかし、その機体は右側と左側に搭載されているスラスターを使い、難なく回避する。
だが、全てが回避できる訳がなく、何発かが命中するも、何かの力場に防がれてしまう。

その機体は何かの一線を概していた。
今まで確認されている機体は、あの機動性は鈍重なものだ。
攻撃力に至っては複数機でやっとＩＳを１機落とすのが限界だった。
そして、ＩＳのようにシールドバリアーのようなものを搭載されている。
少なくとも、束にはそう感じ取れた。

気が付くと、戦闘は終了していた。

束の周囲にはＩＳの残骸と、その搭乗者の死体で埋まっていた。
先程、束と罵倒しあっていた隊長機も事切れていた。
最後に、あの機体を化け物と罵っていたが、今ではどうでもいいことだった。
それよりも、謎の機体の方に興味が沸いた。

その機体は赤かった。
紅椿の様な紅ではなく、夕暮れの様な赤だった。

これが、束がネクストＡＣ『ストレイド』と五反田弾との始めての出会いだった――――

現在

「ふふ、あの時は運命を感じたね～。この私が言っても意味はないけどね。」

束は弾との出会いに苦笑した。
かつての自分なら彼に興味がなく、無視していただろう。
しかし、彼女は興味を持った。
それも、友人としてではなく、異性として興味が沸いたのだ。

彼女の最初にして最後の恋だった。
この時は不思議と現在の結果に感謝できた。
きっと、弾と巡り会わせてくれたからだから。

そして、後悔をしてしまった。
恐らく、世界が変わってしまったら、この気持ちも無くなるだろう。
かつての自分に戻り、彼を意識しないだろう。
しかし、少しでも希望があるなら、もう一度だけ巡り会わせて欲しい。
この気持ちを得て欲しかった。

そう束が思っていると、アラームが鳴り響いた。
エーレンベルクのエネルギーがチャージを終えたのだ。
そして、警告が鳴り響く。
エーレンベルクは、本来なら完成に１０年以上掛かるはずが、たったの２年で製作したのだ。

当然、欠陥があった。
その破壊力は高いが砲身が脆く、一発を撃つだけで自壊してしまう。
更には、発射の余波で制御施設ごと数ｋｍ以上が消滅してしまうので、管理する人間は助からない。

だから、施設にいる人間は束のみなのだ。
勿論、誰かに言われたからではなく、自分の意思で施設にいるのだ。
その理由は『始まりは自分なのだから、最後も自分で終わらせたかった』からだ。
彼女からしたら未練は一つぐらいだった。
余りにも普通の未練だが、彼女には大切なことだった。

「最後くらい、女性の幸せを味わってみたかったな～。」

だが、それはもはや叶わない夢だった。
ならば、終わらせなければならない。
全ての終わりのために。

「・・・先に逝くね、弾くん。」

そう束が呟くと、発射ボタンを押した。

エーレンベルクの発射と同時に制御施設を閃光が包み込む。

第7話：終わりと、始まり

「束さん・・・」

弾はエーレンベルクから発射された閃光を見て、束の最後を悟る。
計算状、エーレンベルクの倒壊と共に、制御施設は余波で消滅する。
恐らく、束は助からないだろう。

だが、それも彼女も覚悟の上だった。
束は自らが始めた狂気を命と引き換えにすると決めたのだ。
そんな彼女の覚悟を止めることはできない。

「余所見すんじゃねぇ！」
「く！」

弾が束を思っていると、一夏が雪片弐型で攻撃を加えてきた。
弾はそれをクイックブーストで避けると、距離を取りながらマシンガンを連射する。
一夏は弾丸を避けもせず、当たりながら『瞬間加速』で突進してきた。
弾は追い付かれまいと、ＯＢを使い、距離を取る。

弾はそんな一夏の行動に疑問を覚える。
確かに一夏のＩＳ『白式』は接近に特化した機体だ。
それならば敵に接近して切り込むのが上策だ。
しかも、弾としては迷惑なことだが、一夏のＩＳには『零落白夜』という特殊な能力がある。
これはあらゆるエネルギー兵器やシールドを無効することができる。
この能力があれば、ＩＳのシールド・バリアーとネクストのＰＡも

無効にできる。
それ故、この能力を持つＩＳの搭乗者である一夏と千冬は、『世界最強の攻撃力を持つＩＳ』の搭乗者と言える。

しかし、それはＩＳが最強の攻撃力を誇っても、搭乗者本人が最強ではない。
それにいくら攻撃力が高くても、当たらなければ意味を成さない。
避けてしまえば良いのだから。

しかも、零落白夜には欠点がある。
その欠点は『ＩＳのエネルギーを全てが攻撃に転換する』という燃費の悪さだ。
ＩＳは基本的にエネルギーが切れた場合、強制的に待機状態になる。
この状態になると搭乗者を守る絶対防御は機能しなくなる。
その様な、状況になるのは戦闘でシールド・バリアーを消費した時だ。
だから、大抵は攻撃を避けて当たらない様にする。

だが、絶対に攻撃が当たらない状況は存在しない。
一夏の白式の様に接近戦だけならあるかもしれないが、生憎、現在の時代は遠距離や中距離が主力だ。
そんな時代に、接近戦特化の機体は古い骨董品と変わらない。
これだけを考えれば『零落白夜』は使い道の難しい諸刃の剣だ。
せめて、遠距離兵器で使えれば問題はないだろが、それでも燃費は悪い。

しかし、例外は存在する。
例えば織斑千冬の場合、接近用の武器『雪片』だけで世界の頂点に登り詰めた。
その実力は世界最強のＩＳ搭乗者に相応しく、弾自身、戦って身に

染みていた。

変わって、一夏を見てみる。
一夏のＩＳは千冬のＩＳ『暮桜』の後継機であり、聞いた話によると、『白騎士』のコアを利用している。
それ故か、『零落白夜』と搭乗者の生体再生の能力を有していた。
それだけを聞くだけでも厄介な能力なのに、スペックは『暮桜』以上だ。
搭乗者が千冬なら弾は既に倒されていただろう。

しかし、そんな機体も素人が乗っては唯速い車と同じだ。
現在、一夏は唯突撃をしてくるだけで、弾の攻撃を避けもしない。
勿論、弾はそんな無作為な突撃による攻撃が当たるはずもない。
簡単に避けて回避する。

だからこそ、弾はこの行動に違和感を覚えた。
国家解体戦争以前、一夏が戦っている姿をテレビで見たが、こんな素人の戦法は取らなかった。
だから、弾はそんな一夏の行動を冷静に考えていた。

「（この戦い方に何か裏が・・・？）」

そう弾が考えていると、あることが思いつく。

「（あれ？俺の弾丸を一夏は何発受けた・・・？）」

彼是、弾と一夏が戦闘を開始して既に３０分以上経っていた。
その間に一夏は既にエネルギー切れを起こしてもおかしくない。
だが、一夏は無傷で悠然と飛び続けている。

「（ちょっと待てよ。無傷・・・？）」

そこで弾は弾数を確認する。
両手のマシンガンの弾数は残り僅かになっていた。
そこで弾は一夏の狙いが何なのかが読めてきた。
それを察したのか、一夏はニヤリと不気味な笑みを浮かべた。

「おやおや～。やっとわかったか、くず鉄。俺がただ無作為に突撃をする馬鹿だと思ったか？そんなのはＩＳ学園の頃に卒業してるわ。俺はただてめぇが弾切れを起こすのを待っていただけだ。わかるか、雑魚？」
「・・・」

弾は答えない。
今更、答えたって状況が変わらない上、無駄だと判断したからだ。
それよりも何故、一夏はエネルギー切れを起こさないのか疑問だった。
すると、一夏は歪んだ笑顔を向けた。

「お前、俺が何でエネルギー切れを起こさないか疑問だろ？何、簡単なことだよ。俺のＩＳのコアには搭載されている能力『零落白夜』は燃費が悪くてね。それを補うためのＩＳも搭乗者がくたばっちまった。あ、そう言えばお前が殺したっけ？」
「・・・」
「しかたないから、そのコアだけでも代用しようと思ってたわけよ。・・・エネルギータンクの代わりにな。」
「！？」

そこで弾は理解した。
一夏のＩＳが何故、動き続けているのか、そんなことをできるのは

束の妹の篠ノ之箒が持つ、ＩＳ『紅椿』の能力『絢爛舞踏』しかあり得ない。
あの能力ならエネルギーの回復ができる。

「まったく、箒のヤツ。千冬姉を守れないだけでも万死に値するのに、しまいには死んじまうしよ、どこまでも役立たずだから呆れてものが言えないぜ。しかしよ、『紅椿』のコアは使えるから利用している訳よ。あ、発動できているのは本人の脳髄を一緒に取り付けているからだぞ。」
「・・・。」

弾は沸々と怒りを覚える。
自然と握っているマシンガンに力が入る。

「（これが、これが今の一夏なのか！？俺の悪友で、箒との結婚で喜び自慢する馬鹿で、妹が恋をした、大切な人たちを守るって言っていた、あの一夏なのか？）」

弾は、自分が理不尽な怒りを覚えているのもわかっている。
今の一夏は悪友の一夏ではない。
そんなことは戦いを始めた時からわかっていた。

だが、ほんの少しでもかつての一夏であることを望んだ。
しかし、初めて対峙して結果、簡単に裏切られた。
もはや一夏の面影はなく、ただの周りに害になる何かだ。

それの決め手になったのは、箒だ。
自分の妻であり、死が別つまで共にいるべき女性を簡単に貶し、あまつさえ、その死体を弄る。
尚且つ、悪友の顔をしたものが言うと、より怒りが込み上げる。

「ほんと、どいつもこいつも役立たずだよ。箒は千冬姉を守れないゴミだし、ラウラは戦うこともなく、死ぬ雑魚だし、セシリアは冷静な判断もできない馬鹿だし、シャルと鈴は二人がかりでも負ける、負け犬だ。まったく、やっぱり千冬姉以外はメス豚だよ。」

箒に続き、今度は友人たちの侮辱を始めた。
彼女たちも箒や、弾の妹の蘭と同じで一夏を愛していた。
それも異性としての認識だ。

そんな彼女たちの気持ちも、簡単に踏み躙る一夏。
これでは彼女たちが余りにも報われない。

そして、弾の怒りは頂点に達した。

「お前といい、束さんといい、地球の猿どもも無駄死にが好きだよな。」
「！？」
「今更、逆らっても死ぬ苦しみが増えるだけなのに、無駄なことをする。御蔭で千冬姉は死んだ。てめぇらは無駄なことをするゴミだ。お前らのようなやつは、もっと苦しませて殺す。まずは、子供から引き裂き、弄りながら殺す。その後で裏切った女どもを牛の血を抜くように殺していく。最後に男共は一人一人宇宙のゴミにして殺して・・・」
「一夏ぁ！！」

次の瞬間、弾の怒声と共にマシンガンが撃たれた。
その撃ち方には冷静な判断はなく、怒りに任せて撃っていた。
弾の怒りの引き金になったのは無駄死という言葉だった。

その言葉は今日までの戦いで希望を信じて、死んでいった戦士たちや、それを支えてきた人達に対する侮蔑だ。
それを簡単に言う一夏は、容赦も情けも掛ける必要はない。

だから、この男を殺す。
こんな男は一秒でも生かしたくない。

一方、一夏はネクストの搭乗者が誰なのか理解する。

「へぇ。弾だったのか・・・。」

一夏は驚きはしたが、どうでもよく感じている。
確かにストレイドの正体がかつての友人だったが、そんな事はどうでもいいことだった。

所詮は姉の千冬に逆らい、殺した害虫の一匹だ。
八つ裂きにして、殺す事には変わらないのだから、思うことはない。

ふと、一夏は中学の入学時を思い出す。
そのころは一夏と弾、鈴は友人ではなく、赤の他人だった。
入学したては『千冬の弟』という理由で寄ってくる人達がいたが、暫くして、何故だか男子全員から無視されていた。
代わりに、女子からは待遇は良かったが、理由は今でもわからないままだ。

ある日、一人の男子が喧嘩を売ってきた。
その喧嘩を売ってきた理由が、『俺の妹までもフラグを立てといて、回収をしない馬鹿を殺すため。』という事だった。
その後、一夏と男子は激しい喧嘩の末、一夏の勝利に終わる。
その時の男子が、後に友人となる弾であった。

「くくく、こうすると中学の時の喧嘩を思い出すなぁ、弾？あの時は俺が勝っていたけどな。」
「何が言いたい？」
「何が言いたいか、だって？簡単だ。てめぇは俺には勝てねぇ。例え、一生を賭けてもなぁ！」
「舐めるなよ！狂人が！」

弾は今の一夏だけには負けられなかった。
確かに、かつての弾は一夏に喧嘩を売り、あっさりと負けた。
だが、負けていたのは、その時の喧嘩だけではなかった。

例えば、成績では常に上位をキープしており、秀才派だった。
更には、スポーツに置いても小学校の頃に剣道していてか、天才派でもある。
尚且つ、当人の顔が綺麗に整っているので、イケメンだ。
しかも、『千冬の弟』だからと女子からは絶大な人気を誇っていた。

当人がその事を自覚があれば、まだ救いがあると思う。
しかし、当人にはその自覚が全くなかった。
その為、男子からは『無自覚で、女性に愛されるために生まれてきたクソ野朗』と思われている。
だから、弾を除けば男子で一夏の影口を叩く人は後を絶たなかった。

しかし、相手は『千冬の弟』だ。
余り強く言うと何があるのかわかったものではない。
事実、一夏に強く批判する男子は、女子から袋叩きにされたり、先生からの嫌がらせや、酷い時は退学もあった。
だが、当人の一夏は知らないし、知ろうともしなかった。
そんな一夏の友人こと、悪友の弾との友情は単純な切っ掛けだった。

それは一夏が帰り道で、男子の集団に絡まれていた時だった。
その状況の理由は、とあるカップルと一夏の行動が原因だった。
そのカップルは弾の中学でバカップルと言われる程の二人だった。

そんな二人がある日のこと口論になった。
原因は彼女が「男なら女の言うことを聞きなさい！」と言ってしまったのが原因だ。
この御時世、『女尊男卑』の考えを持つ女子が多い。
しかし、自分の彼女がそんな考えだったなんて、彼氏は思いもしなかっただろう。
この場合、彼女が悪いはずが、当人は全く気にしていなかった。

この時、彼氏はつい平手打ちをしかけてしまった。
しかし、その手が彼女の頬に当たる前に彼氏は腹を殴られて膝をついた。
彼氏が殴ってきた人物を見上げると、その男が一夏だった。

一夏は「男が女に手を上げるなよ！」と言うと、その場にいた男子はざわつく。
どう見ても彼女の方が悪いのに何故、彼氏が怒られるのだろうか？
確かに、男が女に手を上げるのは良くはない。

しかし、明らかに非があるのは彼女だ。
そんな彼女は一夏に熱い視線を向けていた。
どうやら、一夏に見惚れているようだ。

その彼女の視線に、彼は気が付いて一夏に掴み掛かる。
しかし、一夏は彼氏の掴み掛かる手を逆に掴んで投げたのだ。
投げられた彼を見て、教室が騒然としていた。

騒ぎを聞きつけた先生が教室に入ってくる。
先生が教室の中を諌めると、原因を聞きだしていた。
すると、元凶の彼女が先生の前に出る。

その時は、流石に自分が原因だと先生に言うだけと思っていた。
あのカップルは小学校からいるのだ。
早々に拗れるとは思わない。

しかし、彼女も『女尊男卑』に毒された女性だった。

「彼がいきなり私を殴ろうとして、それを織斑君が守ってくれました。」

それを聞いて男子は絶句した。
よりにもよって彼氏が不利になる発言をするなんて思わなかった。
この時、誰かが指摘できれば彼氏は処罰はされないだろう。

しかし、彼氏は運が悪すぎた。
事実、先に手を上げたのは彼氏の方だ。
更に酷いのは、先生が女性だったことだ。
例え、説明しても聞き入れてくれず、説明した男子も処罰される。
女子は言わずとも助けるわけがない。

だから、男子は何も言わなかった。
その後、彼氏は先生に連れていかれていき、次の日から学校に来なくなった。
聞いた話によると、その日の間に退学になったらしい。
更には、退学になったことで親からは離縁されてしまい、自殺したらしい。

彼女の方は簡単に一夏に乗り換えて、追っかけを続けていた。
それを見た弾は彼女に「殴られていればいいのに・・・」と思っていた。
しかし、あの時、誰かが彼を救っていれば死ななかったかもしれない。

だが、弾を含む男子は助けなかった。
自分の身を危険にさらすほど、馬鹿はいない。
しかし、見捨てたことには変わらない。
だから、自分も同罪だから言えるはずがない。

そんな帰り道、妹の蘭と帰っていると、男子に囲まれている一夏を発見した。
囲んでいる男子は、あの彼氏の友人たちで、どうやら報復に来たらしい。
集団でやってきたのは、格好が付かないが勝てない敵だから集団でやるのは当然だ。
最初は助けるつもりはなく、自業自得だと思っていた。

すると、蘭がその集団に文句を言いに向かってしまった。
弾は蘭を止めたが、静止を聞かずに飛び込んでいった。
仕方がないので、弾は蘭を助けるために集団の中に飛び込んだ。

喧嘩が終わった後、弾はボロボロになった。
蘭は辛うじて無傷だったが、何故だか兄よりも一夏の方を心配していた。
一夏は弾ほどボロボロでもなく、掠り傷程度だった。

これが弾と一夏の出会いだった。

そんな事があったなと、弾は思い返しながら一夏を撃ち続けた。
戦い方は先程とまるで変わらず、一夏の突撃による接近戦を避けて、中距離からの射撃で応戦した。
一夏の兵装は全てがエネルギー兵器のため、エネルギーを大量に使用する。
しかし、『紅椿』の能力をエネルギー回復に使用しているため、全く減ることがない。

一方で、弾の兵装は背中の2砲の『コジマキャノン』を除けば、使用している兵装はマシンガンだけだ。
一時は『コジマキャノン』で倒すか考えたが、直ぐに無理だと判断した。
現在、高速戦闘を繰り広げているため、とても『コジマキャノン』を使う余裕はない。
しかし、マシンガンではシールドバリアーの回復を順次続ける『白式』を落とすことはできない。

このままでは先に弾切れになり、弾は負けてしまう。

そして、等々、その時は来た。
弾のマシンガンから弾丸がでなくなったのだ。

「弾切れのようだな、弾。そんでもって死ね！」
「！？」

一夏は弾切れを確認すると、弾に左手の武装『雪羅（せつら）』を開いて向けた。
『雪羅』から巨大なエネルギーが蓄積される。
それは恐らく、弾の部隊を壊滅させた兵器だろう。

弾の行動は速かった。
マシンガンを急いで捨てて、『コジマキャノン』を向ける。
『コジマキャノン』のエネルギーを充填するが、『雪羅』の方が速い。

「じゃあな。向こうで束さんによろしくな！」
「くっ！？」

次の瞬間、一夏は『雪羅』を放つ。
それは白いエネルギーと紅いエネルギーが混ざった塊だった。
弾は充填中の『コジマキャノン』を放つが、砂煙を上げて、『雪羅』のエネルギーに包まれる。
エネルギーが弾の立っている場所にくると、爆発が起こり、『雪羅』を閉じて確認する。
弾が立っていた場所には何もなく、ただの荒地になっていた。

「は、ははは、あはははははぁ！やった、やったよ、千冬姉！殺した、殺したんだよ！仇、仇を！あはははははははぁ！」

狂った一夏は勝利に酔いしれて、今は無き姉に報告していた。
仇は討つということは、彼にとって美酒と同じだ。
今まで満たされなかった心が、満たされていく。

しかし、少しして高揚が薄れてくる。
「まだだ。まだ足りない。」と心が渇望する。
そして一夏の次の標的が決まった。

「確かあっちに集落があったよな・・・」

一夏はそう呟くと、ブースターに火をつける。
空中に上がり、一夏は標的である『人類』に向けて動き出した。
全ての人類を狩れば、姉である千冬が誉めてくれる。
そう一夏は信じていた。

しかし、織斑千冬ならこう言うだろう。

それが驕りだと。

次の瞬間、後ろから砂煙が上がる。
一夏が振り返ると、そこには『ストレイド』こと弾がいた。

弾が助かったのは、ある戦略に奇襲戦略だった。
一夏が『雪羅』を放った瞬間、弾は『コジマキャノン』を地面に放った。
それにより、地面に大きな穴ができる。
後は、『コジマキャノン』をパージして、その穴に弾は飛び込み、『雪羅』を回避したのだ。
ＩＳのハイパーセンサーが使えたら状況は違ったはずだ。
しかし、これは弾の奇襲成功であった。

一夏に反応をできるはずもなく、無防備のままであった。
弾は真っ直ぐに両腕を伸ばして振り落とすと、手の甲からレーザーが現れて、一夏の両腕を切り落とす。
両腕を切り落とした弾は、一夏の腹部を蹴り飛ばして、地面に叩き付ける。

地面に叩き付けられた一夏は、直ぐに立ち上がろうとしたが、弾に踏みつけられて立てなくなる。
一夏は両腕を無くしても弾を睨みつける。
その瞳には怒りと憎しみが篭っており、人を殺すぐらいの感情があった。

すると、一夏は突然、泣き始めた。
弾は突然のことに驚いたが、それでも警戒を怠らなかった。

「ちっくしょ・・・ちくしょぉぉ！何でだ、何で！？」
「・・・」

一夏の涙の理由、それは恐らく、復讐が果たせないからだと感じているからだ。
彼にとって、両腕を失った痛みよりもその方が堪えた。
それだけ、千冬は一夏の中で大きな存在だったのだろう。

だが、それは弾も同じである。
これまでの戦いで弾は多くの仲間と家族、恋人を失っている。
そして、それらは帰っては来ない。

だが、これから先の未来を生きる人類には同じ思いはして欲しくない。
だから、弾は幕引きをする。
弾は最後の一撃のレーザーブレードを構える。

「一夏・・・。これで終わりだ！」
「くそたれがぁ！！」

その時、『ストレイド』が緊急警報が鳴る。

弾の背後から急速接近する機影がいるらしい。
それも高速移動しているらしく、その速度は約１０００ｋ以上だ。
恐らく、ブリーフィングであった謎のＩＳだ。
弾は急いで反転してレーザーブレードを構える。
謎のＩＳは振り返ると既に背後にいた。
弾は反射的に、そのＩＳにレーザーブレードを振りかぶる。

「お兄」

しかし、弾はレーザーブレードを相手の首を刎ねる手前で止まった。
いや、弾が止めたのだ。
その手が止めたのは簡単なことだった。

目の前の搭乗者は長髪で、弾と同じで赤く、綺麗に流れていた。
年齢は弾と同じか、少し下ぐらいの女性だった。
そして究めつけは、その顔だ。

その顔を弾は忘れるわけがない。
弾が、この世界に生まれて1年後から、国家解体戦争が起こる日まで
いたのだ。
そう、その女性は――――

「ら、蘭・・・？」

弾は動けなくなった。

目の前に、死んだと思っていたはずの妹がいる。
それが弾に一瞬の隙を与えることになった。
蘭は弾に、にっこりと微笑む。
その笑顔は、まるで無垢な少女だった。

「じゃ、死んで♪」

次の瞬間、弾は背後に吹き飛ぶ。
地面に叩き付けられた弾は、何が起きたのか理解できなかった。
目の前の蘭を見ると、手にはショットガンを持っており、返り血が付いていた。

弾はそっと手を腹部に当てる。
触った手を見ると、真っ赤な血が付いていた。

そこで弾は、妹に撃たれたと気が付く。

「・・・いつ・・・からだ・・・？」
「あれ？何で撃ったかは聞かないんだ。」
「当たり・・前だ・・・。」

ＩＳを装備したものは全て敵になる。
そんなことは、弾も知っている。
今更、聞く必要性はない。

「ふ～ん。そっか。そうだね～、国家を滅ぼす前日からだよ。」
「！？」

それを聞いて弾は戦慄した。

国家解体戦争の前日は、蘭の宇宙コロニー在住が決まった日だ。
その日までは宇宙コロニーは人類の新たな住処になるはずだった。
しかし、国家解体戦争が起きたため、悪魔の巣窟と後に呼ばれた。
その前日からだと言うなら、弾にとって最悪のことに繋がる。

「・・・お前が・・・殺し・・・・たのか・・・・？母さんや・・・・親父・・・・じいちゃんを・・・・」
「うん。そうだよ。い～やぁ、あれは大変だったよ？おじいちゃんやお母さんが私の異変に気が付きそうになっていたからね、しかたないから殺すことにしたんだ。あ、私の一夏さんからの任務はねぇ、国家を解体後の人類に潜入して、男性や、それに加担する女性の居場所を宇宙コロニーに流すんだよ。」

それを聞いて弾はやっと一番の疑問の答えが出た。
何故、国家の重鎮でもない自分の家族が、あの日、国家の関係者だけが狙われた日に殺されたのかが、わかった。
確かに蘭はＩＳの適性がＡなので、宇宙コロニー側が使わないはずがない。

しかし、疑問が浮かぶ。
あの日、足元に転がる蘭の携帯の血は誰のだったのかと考える。

「それでさぁ、お母さんがおじいちゃんとお父さんを殺している間にさぁ、私の部屋に逃げて、お兄に電話しようとしたんだよねぇ。それも私の携帯でだよ。だからさぁ、電話する前に殺してやったよ。あの時のお母さんの顔は面白かったよ。実の娘に殺される絶望でいっぱいだったねぇ。」
「・・・・」

弾は絶望して、何も言えなかった。
それはもう直ぐ来る死の絶望でも、後少しのところでの判断ミスによる絶望でもない。
大切な家族を守れなく、妹を救えない自分に絶望したのだ。

「（何故、今になって会うのだろうか・・・？）」

できることなら妹を救いたい。
だが、救うには余りにも遅すぎた。
もう、方法も探す時間も余禄も、弾にはなかった。
だから、弾は全てを終わらせることにした。

蘭は弾にショットガンを向ける。

「じゃ、今度こそ死んで♪」
「ああ・・・だが、一人じゃ死なねぇよ！」
「！？」

弾は束が最後に残したシステムを起動させる。
弾の周囲にコジマ粒子が圧縮されて、開放される。
開放されたコジマ粒子は、ＰＡやＯＢに使用されるエネルギーを全て破壊に変える。
そのエネルギーは蘭や一夏を包み込み、消し飛ばしていく。

『ＡＡ（アサルト・アーマー）』

これは防御に使用するＰＡを破壊に使用したネクストの兵器。
束が『零落白夜』を『コジマ粒子』で再現した兵器である。
『零落白夜』と違い、範囲攻撃なので、近距離にいる蘭や一夏では

避けられない。

だが、これは不完全なできだった。
何故なら、この兵器を使用した『ネクスト』は耐え切れずに自滅するからだ。
事実、使用した『ストレイド』は搭乗者（リンクス）の弾と共に崩壊をし始めた。

薄れいく意識の中、弾は思う。
きっと、こんな未来にならなかったはずだ。
あの国家解体戦争がなければ、ＩＳが存在しなければ、こんな戦争は起きなかったはずだ。

悩みに悩んだ末に、弾と束はある賭けに出た。
途方も無く馬鹿で、失敗の可能性が高かった。
だが、これ以外に二人が縋るものはなく、希望も託せるものもなかった。

その希望を、あの二人の子供に託したのだ。
悔いはなかった。

「（頼むぜ、マク坊・・・）」

そして弾の意識が完全に消えたのだった・・・。

こうして地球側と宇宙コロニー側の戦争は終結した。
後に生き残った人類はこの戦いを、天にいる宇宙コロニー側と地にいる地球側の戦争。
『天地戦争』と名付けて語り続けた。
この戦争後、人類は住めない地上から逃げるように地下へと生活の場を変えた。
以降、数世紀、人類は地上から姿を消したのだった――――

時は戻り、数十年前のことだった。
世界中のミサイルが日本に向けられて放たれた。
それを迎撃のために始まりのＩＳ『白騎士』が現れた。
後に、この事件を『白騎士事件』と世界は名付けた。
そんな世界を騒がした事件の裏、ある通信が行われた。
その通信は傍受も、録音もされずに二人の男だけの会話だった
『始まったか・・・。』
『ああ、やっと計画の第一段階だ。暫くは世界の目はＩＳに向くだ

ろう。そうなれば我々も動き易い。』

『だといいがな・・・。折角、半世紀かけての計画だ。失敗は許されない。』

『わかっているさ。我々の行動に人類の運命が決まる。・・・あの天才に邪魔はさせない。』

『ああ、そうだな。・・・だが後１０年だ。それまでは動かずに成長を待とう。』

『わかっている。・・・来年のネクストとＡＦ（アームズ・フォート）の完成を待つだけだ。』

『そうだ。完成した二つが揃い、１０年後には―――』

『クローズ・プランを開始しよう。』

ここで二人の会話は終わり、通信も途絶えた・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9660w/

IS~未来を変える力~

2011年12月2日01時47分発行